三重県の農村暮らし応援ガイドブック

みえいろ 2018

暮らし方も
働き方も
いろいろ。
自分らしい
農村暮らしを
三重で
はじめませんか

三重県

みえいろ
三重県の農村暮らし応援
ガイドブック｜みえいろ

MIE pref.
三重県

暮らし方も働き方もいろいろ。
自分らしい農村暮らしがきっと見つかる三重県へ。

日本のほぼ中央の太平洋側に位置する三重県は、伊勢湾に面する伊勢平野や南北に連なる紀伊山地、志摩半島から熊野灘に至るリアス式海岸など、地形が変化に富み、四季折々に異なる表情で訪れる人々を魅了しています。
また、米をはじめ、ブランド和牛として知られる松阪牛・伊賀牛や伊勢茶、みかん、伊勢えび、あわびなど、一年を通じてたくさんの海の幸・山の幸が生み出され、「食の宝庫」としても知られています。
さらに、日本人の心のふるさととして親しまれる「伊勢神宮」や、伊勢から熊野三山へ続く世界遺産「熊野古道」をはじめとした、伝統ある文化・歴史に恵まれ、交流の拠点として発展してきた背景から、交通網も充実しています。
このように多様性に富む三重県は、暮らす場所にも働き方にも、たくさんの選択肢があることが自慢です。
農村暮らしの先輩の声を聞きながら、あなたならではの農村暮らしを三重県で実現しませんか。

CONTENS

4：三重県農業の特徴
6：農村暮らしの先輩に聞きました
7：桑名市 上田さん
8：いなべ市 寺園さん
10：四日市市 清水さん
11：鈴鹿市 尾和さん
12：亀山市 太田さん
13：多気町 小川さん
14：多気町 岡山さん
15：伊勢市 南さん
16：伊勢市 倉野さん
17：伊賀市 村山さん
18：伊賀市 奥田さん
19：伊賀市 田公さん
20：伊賀市 横田さん
21：伊賀市 森さん
22：名張市 鯨岡さん
23：紀北町 石倉さん
24：紀北町 岩本さん
25：熊野市 村瀬さん
26：熊野市 鈴木さん
27：御浜町 仲井さん
28：御浜町 古川さん
29：紀宝町 岩崎さん
30：ビジネスプラン実証活動紹介
31：農村暮らし 市町別ガイド
32：桑名市・いなべ市・四日市市・亀山市
33：津市・松阪市・大台町
34：多気町・明和町
35：伊勢市・志摩市・玉城町
36：大紀町・度会町・南伊勢町
37：伊賀市・名張市
38：尾鷲市・紀北町
39：熊野市・御浜町
40：紀宝町
41：JA・市町・県が連携して
新規就農の受け入れを進めている事例
42：農業へのチャレンジを応援します！
43：新規就農者のための主な支援制度
44：農村暮らし体験のススメ（農林漁業体験民宿の紹介）
46：移住支援・相談窓口・地域おこし協力隊
47：新規就農相談窓口一覧

本誌掲載の情報は平成 30 年 3 月現在の情報です。法改正などに伴い変更になる場合があります。
最新の情報は、個別の問い合わせ先までご確認ください。

鉄道利用のアクセス

- 東京駅 —（新幹線のぞみ 約1時間40分）— 名古屋駅
- 博多駅 —（新幹線のぞみ 約3時間20分）— 名古屋駅
- 名古屋駅 —（JR 約50分）— 津駅 —（JR 約15分）— 松阪駅 —（JR 約21分）— 伊勢市駅 —（JR 約19分）— 鳥羽駅 —（近鉄 約30分）— 賢島駅
- 近鉄名古屋駅 —（近鉄 約50分）— 津駅 —（近鉄 約20分）— 松阪駅 —（近鉄 約12分）— 伊勢市駅 —（近鉄 約16分）— 鳥羽駅 —（近鉄 約30分）— 賢島駅
- 中部国際空港 —（高速船 約45分）— 津なぎさまち —（バス 約10分）— 津駅
- 新大阪駅 —（JR 約5分）— 大阪駅 —（JR 約15分）— 鶴橋駅
- 大阪難波駅 —（近鉄特急 約5分）— 鶴橋駅 —（近鉄 約50分）— 名張駅 —（近鉄 約35分）— 松阪駅
- 南海なんば駅 —（南海特急 約37分）— 関西空港 —（JR特急はるか 約35分）— 天王寺駅 —（JR 約5分）— 鶴橋駅
- 近鉄京都駅 —（近鉄 約2時間）— 松阪駅
- 尾鷲駅 —（JR 約1時間20分）— 熊野市駅 —（JR 約30分）— 賢島駅

車利用のアクセス

- 東京 —（東名高速道路 約3時間）— 豊川IC —（国道42号線 約1時間15分）— 伊良湖 —（伊勢湾フェリー 約55分）— 鳥羽
- 東京 —（東名高速道路 約3時間40分）— 豊田JCT —（伊勢湾岸自動車道 約40分）— 四日市JCT —（東名阪自動車道 約1時間）— 勢和多気JCT —（伊勢自動車道 約20分）— 伊勢IC —（伊勢二見鳥羽ライン 約20分／伊勢志摩スカイライン 約20分）— 鳥羽
- 名古屋 —（東名阪自動車道～伊勢自動車道 約1時間30分）— 勢和多気JCT
- 大阪 —（西名阪自動車道～名阪国道 約1時間50分）— 伊勢関IC —（伊勢自動車道 約35分）— 勢和多気JCT —（紀勢自動車道 約55分）— 尾鷲北IC —（国道42号線 約10分）— 尾鷲南IC —（熊野尾鷲道路 約20分）— 熊野
- 京都 —（名神・新名神高速道路 約1時間）— 亀山JCT —（伊勢自動車道 約35分）— 勢和多気JCT

※時間は目安になります

MIE pref.
三重県

三重県農業の特徴

三重県は南北に長く、伊勢湾に面する伊勢平野や南北に連なる紀伊山地・リアス式海岸の志摩半島・上野盆地など変化に富んだ地形を有しています。このように多様な地形や温暖な気候を生かし、米・麦・大豆など水田農業を中心に、ブランド和牛として知られる松阪牛・伊賀牛や生産量全国第３位の伊勢茶、野菜や果樹など多様な農産物が生産されています。県産農産物の多くは県内の直売所やスーパー、宿泊施設、飲食店などへ供給されるとともに、隣接する中京・阪神の大消費地へも流通しています。

水田農業

本県の耕地面積のうち水田の占める割合は約75.5%（全国平均54.4%）と高く、米・麦・大豆などの水田農業が盛んです。主食用米ではコシヒカリの作付けが約８割を占め、西日本一のコシヒカリの産地でもあり、主に県内及び関西・中京圏で販売されています。
中でも、気候や土壌条件に恵まれ、良質の産地として知られる伊賀地域のコシヒカリは、「伊賀米」として県内外で高く評価されています。平成 24（2012）年からは、冷めてももっちりした食感があり、コシヒカリに負けないおいしいお米として、県育成の新たなお米「結びの神」の生産拡大に取り組み、ブランド化をめざしています。
また、北勢から中勢の平野部を中心に、米・麦・大豆が２年３作で栽培されています。小麦については、「伊勢うどん」などの製麺用の需要に応じて年々作付面積が拡大し、生産面積は全国５位と主産県の一つとなるまで成長しています。

▶主産地　米：県内全域、小麦：松阪市・津市・鈴鹿市

働いてみませんか？

▶米農家で働いてみませんか？

平野部では、200ha を超えるような大規模な米農家が活躍しています。大規模農家では求人していることがありますので、興味のある方は（公財）三重県農林水産支援センターまでご相談ください。【（公財）三重県農林水産支援センター　0598-48-1225】

伊勢茶

温暖な気候と適度な降雨量・朝晩の寒暖差を生かし、山間地域から中山間地域等で古くから茶が栽培され、栽培面積・荒茶生産量・生産額ともに、全国第３位の主産県となっています。南北に長く、各産地で地域特性を生かしたお茶が生産されていることが特徴で、北勢の鈴鹿山脈山麓では煎茶やかぶせ茶、中南勢の谷あいの傾斜地や川沿いの平地等では煎茶や深蒸し煎茶が生産されています。
県産100%の緑茶を「伊勢茶」と総称しています。立地条件に恵まれているため生育も良く、葉肉が厚くコクのある味わいのお茶として知られています。

▶主産地
北勢地域：鈴鹿市・四日市市・亀山市（煎茶・かぶせ茶）
南勢地域：大台町・度会町（煎茶）・松阪市（深蒸し煎茶）

野菜

都市近郊を中心に野菜の産地が形成されています。生産額の多い品目はトマト・いちご・ねぎで、トマトは名古屋市の近隣である北勢、いちごは中南勢、ねぎは南勢及び北勢で多く生産されています。そのほか、キャベツ・だいこん・はくさい・きゅうり・みつば・かぼちゃなど多様な野菜が生産され、主に県内市場へ出荷されています。
近年、野菜の需要が高くなっており、県内各地で新たな産地育成が進められています。

▶主産地
トマト：木曽岬町・桑名市　いちご：松阪市・伊勢市　ねぎ：伊勢市・鈴鹿市　など

研修生募集中！

▶青ねぎの研修生募集中！（P35）

ＪＡ伊勢が 100% 出資する「(株)あぐりん伊勢」では、２年間の勤務で栽培技術を習得してから独立就農をめざす研修社員を募集しています。
【ＪＡ伊勢 営農自己改革推進室　0596-62-2281】

伝統野菜

南北に長く、海と山に囲まれた地形的特性から、三重県では古くからさまざまな種類の農産物が栽培され、現在まで継承されてきました。平成 20（2008）年には 50 年以上の歴史があり、伝統文化的価値のある野菜６品目を「美し国 ' みえの伝統野菜'」として選定しています。

▶三重なばな
菜種の花が咲く前の芯の部分を若葉とともに摘み取ったものが「三重なばな」です。三重県は日本一の「なばな」の産地です。　（主産地：桑名市長島町・木曽岬町・松阪市）

▶伊勢いも
餅のような粘り気とコクのある味が特徴。
多気町は 300 年の歴史のある「伊勢いも」を継承していくため、栽培農家の育成に取り組んでいます。（主産地：多気町）

▶芸濃ずいき
八頭（里芋）の茎の部分でシャキシャキした食感が特徴。（主産地：津市芸濃町）

▶たかな
「めはり寿司」の材料となるカラシナの一種。（主産地：熊野市）

▶きんこ（さつまいも）
煮たさつまいもを天日で干した食品。昔ながらの製法で素朴な味。（主産地：志摩市・鳥羽市）

▶松阪赤菜
根と葉の軸が美しい紅色で漬物に最適な葉茎菜類。（主産地：松阪市）

果樹

変化に富んだ地形と多様な気候特性を生かし、落葉から常緑まで多岐にわたる果樹産地が形成されています。生産面積は、「温州みかん」が果樹全体の約 45%を占め、次いでかき・うめ・日本なし・ぶどうの順となっています。
県南部に位置する東紀州地域では、温暖な気候を生かしかんきつ類を周年収穫できる産地づくりに取り組んでいます。「温州みかん」をはじめ「カラ」「不知火」など多様なかんきつ類が生産され、県内外に出荷されています。

▶主産地
温州みかん：御浜町・熊野市・南伊勢町　　かき：多気町・玉城町
うめ：御浜町・紀宝町　　ぶどう：名張市・伊賀市

新規就農者募集！

▶みかんの新規就農者募集！（P41）
三重県南部・和歌山県に接する紀南地域では、みかんの新規就農者を育成するため先進農家における１年間の長期研修や農業体験への参加者を募集しています。
【三重県紀州地域農業改良普及センター　0597-89-6126】

花き・花木

北勢・中勢地域では、全国第1位の生産を誇るサツキ・ツツジ類など花木類の産地が形成されています。北勢地域では、シクラメンなどの鉢花や観葉植物などの鉢もの類の産地が形成され、観葉植物の出荷量は全国第2位となっています。
南勢地域では、バラ、ガーベラ類の切り花の産地が形成されています。

▶主産地
花木類：鈴鹿市・津市・亀山市　鉢もの類：四日市市・桑名市・鈴鹿市・木曽岬町
切り花：伊勢市・松阪市

畜産

畜産物の産出額は農業全体の約４割を占め、本県の主要な農業品目です。産出額の最も多い品目は鶏卵で全体の約47%を占め、次いで、肉用牛・乳用牛・養豚の順となっています。1経営体当たりの飼養規模は、酪農が全国第1位・肉用牛が全国第3位と大きく、規模拡大や法人化、畜産物のブランド化や6次産業化も積極的に取り組まれています。

▶主産地
鶏卵：伊賀市・鈴鹿市・津市　養豚：伊賀市・津市・菰野町
肉用牛：津市・松阪市・伊賀市

農村暮らしの先輩に聞きました

桑名市 上田さん
7 ページ

いなべ市 寺園さん
8 ページ

四日市市 清水さん
10 ページ

鈴鹿市 尾和さん
11 ページ

亀山市 太田さん
12 ページ

多気町 小川さん
13 ページ

多気町 岡山さん
14 ページ

伊勢市 南さん
15 ページ

伊勢市 倉野さん
16 ページ

伊賀市 村山さん
17 ページ

伊賀市 奥田さん
18 ページ

伊賀市 田公さん
19 ページ

伊賀市 横田さん
20 ページ

伊賀市 森さん
21 ページ

名張市 鯨岡さん
22 ページ

紀北町 石倉さん
23 ページ

紀北町 岩本さん
24 ページ

熊野市 村瀬さん
25 ページ

熊野市 鈴木さん
26 ページ

御浜町 仲井さん
27 ページ

御浜町 古川さん
28 ページ

紀宝町 岩崎さん
29 ページ

年間580万人もの利用者数を誇るレジャー施設がある桑名市長島町にUターンし、イチゴ農家として第2の人生を歩んでいる上田周平さん。生きていることの実感を得られる暮らし方に憧れ、地元でできる農業を選択した。

KUWANA
桑名市

上田周平さん
（43歳）

生きている実感を得られる暮らしが自営農業の醍醐味

イチゴ農家を選択して本当に良かった

「自分の家族や地域の為に自分が果たすべき役割をきちんと果たしたいという思いがありました。そういう意味で自分が生きている時間をコントロールできる働き方として自営業を選びましたし、私がこの地域で実現できる自営業が農業だったということです。」
とはいえ農業経験が全くなかった上田さんは全てがゼロからのスタートだった。
「非農家である私が農地を取得するためには新規就農者として認められなければならないので、就農計画を作成する必要があるとのことでした。この計画書では作物ごとの指標を使って収支を計算することになっているのですが、当時この地域で収益を得ることができる作物の一つがイチゴでした。」
もともとこのあたりの地域はトマトの産地であったが、上田さんの祖母がイチゴを好んで食べていたということや、生産者が少ないからこそやりがいがあるということから上田さんはイチゴ農家への道を選んだ。「実際にイチゴ農家になった今、イチゴを選択して本当に良かったと思っています。」

利用されていないビニールハウスを借りることで借金０円を実現

イチゴ農家になるための最初の課題がビニルハウスの調達だった。新たにビニルハウスを建てると１千万円以上の資金が必要になる。就農者向けの融資制度もあるが上田さんは借金が嫌いということもあり、何とか自己資金でできないだろうかと空きハウスを探すことにした。
「なかなか情報が手に入らなかったのですが、あるとき研修先の近くで雨ざらしになっているハウスがあることに気づきました。使っている様子もないので飛び込みでお話させていただいたところ、今は使用していないのでそろそろ解体しようと思っていたとのこと。使えるならどうぞということで快諾してくださいました。本当にラッキーでした。」
結局、ビニルを張り直したり設備を追加するなど合計数百万円ほどの出費でイチゴ栽培の環境を整備することができた。
「これから新しく施設園芸農業をするのであれば、僕は空きハウスを探しなさいって言いますね。2,000万円マイナスからのスタートとゼロからスタートするのとでは大きな違いです。」

購入頂いたお客様はすごく良い表情をされています

上田さんは農産物直売所等での販売とともに、自宅の敷地内に売り場を設けて対面販売もしている。「年に２回、ここで“のらくら祭り”と称したマーケットイベントを開催しています。知り合いに出店していただいたりカフェコーナーをつくったりしているのですが、本当にありがたいことに毎回200人程お越しいただいています。みなさんが楽しんでいただいている様子を見ると心から嬉しく思います。」
農業の規模拡大が進み、小規模農家を取り巻く環境は厳しくなるばかりだが、上田さんに悲壮感は全くない。
「大規模農家と同じ土俵で勝負しようと思うと大変ですが、僕のことを知ってくれて買ってくれている方々にとってはそんなこと関係ありませんからね。これから農業を始める方はそういうところを大切にしていくと良いのではと思います。それに農業はお金には変えられない良さがたくさんあるので、ぜひチャレンジして欲しいです。」
上田さんの農業はイチゴだけでなく人とのつながりも生み出している。

半農半カフェから専業農家へ転身

INABE
いなべ市

寺園風さん（30 歳）

名古屋から専業農家を目指して移住した寺園風（ふう）さん。仲間に支えられながら多品種栽培の有機農業を展開している。昨年には旅館を再生した「上木（あげき）食堂」をオープンさせた。

農業を始めることができたのは素晴らしい人との出会いです

「名古屋ではオーガニックカフェと畑を行き来する半農半カフェというような暮らしを 5 年ほどしていました。でも何となくそんなライフスタイルがしっくりこなくて、やっぱり農家になりたいなっていう思いがずっとありました。それで農地を探しはじめたのですがなかなか見つからない。そんな時に、たまたま三重県の地図を眺めていたら " 八風街道 " という道を見つけたんです。僕の名前が " 風 " なので、これはなにか縁があるかもしれないと思い、街道沿いにある三重県いなべ市の知り合いを訪ねました。」

風さんの知人は農業をしたいのであればと、2008 年からいなべ市で U ターン就農している森友喜さんを紹介してくれた。そしてこの出会いが、風さんの農業人生の転換期となった。

「友喜君といろいろ話をしていたら盛り上がってきちゃって、それならすぐに来なよって会ったその日にいなべに来ることが決まりました（笑）。」

このあと、風さんが実際にいなべに来るまで半年以上の期間があるのだが、その間も仕事の合間に森さんを訪ねたり、いなべ市内をウロウロしたりしながら、できるかぎり地域とコミュニケーションし続けることを意識したという。

「当時は 1 時間でも 2 時間でも時間があればこっちに来ていました。特にすることがあるわけではないのですが、これは絶対しなきゃいけないと思っていましたから。」

こうして森さんとの信頼関係を深めていきながら、いなべ市での新たな生活をスタートさせた。住まいが見つかるまで森さんに居候させてもらいながら、更に畑や農機具も全て貸してくれたという。

「僕がいなべにいるのは全て友喜君のおかげです。」

名古屋に通えるアクセスの良さ

寺園さんは奥さんの紗也さんと 2 歳の山（さん）くんの 3 人で暮らしている。

「僕がいなべに来る前に結婚したのですが、妻は名古屋でドイツパンのお店を構えているので、しばらくは彼女だけ名古屋で暮らしながら週末にこっちに帰ってきていました。子どもが生まれてからは営業日を週 2 日に減らしたので、今ではこっちで一緒に暮らしながら名古屋のお店に通っています。」

いなべ市から名古屋までは車で約 1 時間。交通アクセスが良いから、働く環境を変えずに田舎の子育てができる。それにパンの材料となる小麦やライ麦をつくる畑も手に入れた。

「麦をつくるにはそれなりに広い農地が必要だったのですが、いなべ市に相談したりしながら少しずつ増えていきました。」

農家として独立して 4 年目。農地も 4.2ha まで増え、働き方も暮らしも順調のようだ。

壊される運命だった旅館を再生して食堂をオープン

「材木屋の友人から『阿下喜（あげき）商店街の旅館が壊されるけどもしかしたら食堂みたいな使い方ができないかな』って声をかけてもらったのが最初のきっかけです。」
かつて名古屋のカフェで働いていたこともあり、ゆくゆくは飲食ができる場づくりもしたいなという思いはあったことから、風さんは実際に見てみることにした。とはいえ、ようやく軌道に乗り始めた畑仕事に加えて、飲食店をゼロから作り上げていくことは至難の業だ。
「もちろん最初は無理だと思っていました。でもこのあたりには僕らの世代が集まることができる店が無かったし、自分たちが畑でつくった食材を提供できるお店が欲しいなとは思っていたので、その後もみんなといろいろ話したり建物を見直したりしていました。そしたらいつの間にか「じゃあ、やろう！」ってなっちゃって。
大家さんもお店として残してくれるのなら嬉しいと言ってくれたりして、どうすればできるかは後回しに、とにかくお店をオープンすることは決めました。」

そうと決まったらあとは風さん得意の人探し。お店づくりを一緒にしてくれる仲間として、名古屋で風さんの野菜を仕入れていた飲食店の一人に思い至った。
「彼とは名古屋で知り合ったのですが、田舎暮らしをしてみたいって話していたので野菜を配達しに行くたびにお店のことを話していました。そしたらやる気になってくれて来てくれたんです。」

店長兼調理人として、風さんは店づくりの段階から彼に一任した。調理場のレイアウトからメニュー開発、手書きの店内サインも全て彼の仕事だ。
取り壊される運命にあった旅館が
『上木（あげき）食堂』として蘇った。

豚ミンチと根菜のキーマカレー
地元の養豚場で精肉された豚肉と八風農園とゆうき農園の根菜をふんだんに使っている

カウンターチェア。旅館時代に使われていたものを再利用している。
よく見ると「上木旅館」の文字が。

店内ではもちろん八風農園の野菜も販売している。

店長の松本耕太さん。

メニューにはお酒も。このあたりで夜にお酒を気軽に飲めるところがないからだそうだ。

家探しは？

ある日、処分しようと片付けている家があるというので見に行くと、今まで見た中で最高の家でした。すぐに大家さんに交渉すると、住んでくれるならと無償で譲ってくれた上に、すぐに住めるようにと片付けと掃除までしてくれました。これ以上ない条件で住まいを手に入れることができました。

大学卒業後東京で働いていた加奈さんは、東京生まれ東京育ちの聖一さんとの結婚を機に帰郷。加奈さんの実家で茶農家となり14年目。聖一さんは茶畑、加奈さんは古民家カフェと、夫婦で役割分担している。

YOKKAICHI
四日市市

清水聖一さん･加奈さん
（44 歳）　（38 歳）

夫婦の役割分担で、一家で明るくお茶の魅力を発信！

農業は人間らしい暮らしができる

三重の茶どころ水沢の茶農家に生まれ育った加奈さんと、生まれも育ちも前職も東京という、夫の聖一さん。二人は東京で知り合い、結婚して水沢へ。農業とは無縁の環境で育ち、それまでパン屋に勤めていた聖一さんにとって、外の仕事は「大変」の一言。最初のうちは１日の作業が終わると、ぐったりしていたという。

それでも、朝早くから畑に出て、昼間は中休みをして、また畑へ出て暗くなるまで働く、といったメリハリのある暮らしに「人間はこういう暮らしをしないといけない」と、強く感じた。両親に作業を教わりながら、１つ１つ仕事を覚えていった。

一方、加奈さんは２人目の出産後、自宅だった古民家に「かぶせ茶カフェ」をつくった。全国１位の生産量を誇る、三重のかぶせ茶を多くの人に知ってもらいたいという思いからだった。母や妹と切り盛りをしている。

夫婦の役割分担

聖一さんは知り合いがいない土地での就農だったが、茶農家の集まりや消防団などで人間関係を築いてきた。一方、加奈さんは「四日市茶農家女子会」や新商品開発セミナーに積極的に参加し、カフェの開業準備を進めてきた。

茶畑は聖一さん、カフェと販売は加奈さん。そういう役割分担が自然に生まれ、お互いがそれぞれの仕事に力を入れている。

「おいしいお茶を育てるのが原点」という聖一さん。小学２年生の長男、湧功君に将来は跡を継いでほしいと願っている。

就農を考えている人へ

農業は女性一人でもできることが魅力だと思います。思ったことをすぐ実行できるのもやりがいです。（加奈）

農業は辛くてしんどいというイメージがありますが、それは思い込みです。都会の仕事と違い、自分の都合で時間のやりくりができます。（聖一）

生まれは広島、育ちは桑名。父はサラリーマン。上京し金融会社で働いていた尾和さんは、地方農業に興味を持ち、退職後つくば市の農業者大学校で農業を学ぶ。その後、地元に戻り、就農６年目である。

SUZUKA
鈴鹿市

尾和明洋さん
（33 歳）

社長仕込みのチャレンジ精神で地方の農業を切り拓く

社長の人柄に惚れて

生まれは広島、育ちは桑名。サラリーマンの父を持ち、農業とは無縁だった。「自分で商売をしたい」という夢はあったものの、何をするべきか、どこに行くべきか決められなかった。大学卒業後は上京し、金融会社に３年勤めた。その中で、Uターン・Iターン転職が注目されていることを知り、地方農業へと目を向けた。

会社を退職し、つくば市の農業者大学校で農業を学んだ。地元の農業の現状を知ろうと三重を訪れ、研修先でドリームファームスズカの古澤道彦社長に出会った。稲作だけでなく、乳牛用飼料や観葉植物など、広い視野で幅広く手掛け、決してひとつの形に捉われない。そんな社長の人柄に惚れ込み、就農を決意した。

農業の魅力は立てた計画が一進一退すること

最初は「儲かるのでは」と楽観的に構えていたが、すぐにそれが甘い考えだと気づいた。天候に左右され、作業が進まない。だが立てた計画が一進一退するからこそ、そこに面白さも感じている。

水田、観葉植物、飼料用稲に加え、3 年前から白菜も育て始めた。しかし入社して僅か数年の身。耕作レベルはまだ低いと感じている。「当たり前のものを作れるようになりたい」。試行錯誤の日々だが、トウモロコシのサイレージに挑戦するなど、社長仕込みのチャレンジ精神は旺盛だ。

就農を考えている人へ

農業を始めるということは、自分が社長となり経営することです。自分の農業者大学校時代の友人の多くは挫折してしまいました。自分で発想して自分で動くことが好きな人なら、絶対にやりがいがある仕事です。甘く見積もらず、後悔しないように励んでください。

実家が兼業農家の太田さん。
自分たちが食べるものは自分で作りたいという思いで、子育ての環境の良い亀山市への移住を決意。農家とサラリーマンの二足のわらじで、憧れの田舎暮らしを満喫中。

KAMEYAMA
亀山市

太田栄二さん
（47 歳）

自然が豊かでのどかな里山に住んで、働くのは街へ「亀山は、そんな暮らし方に適した場所だと思います」

子育てにも適した亀山市で、憧れの田舎暮らしを実現！

実家が兼業農家だったこともあり、私も将来は、自分たちが食べるものは自分で作りたいという思いがありました。平成 17 年に、田舎暮らしをするために東海地方を対象に移住先を検討。亀山市は交通の便が良いこと、緑が多くて素敵な景観だったことが決め手となりました。また、当時小学生だった娘の教育環境においても魅力的でした。亀山市の小学校は、小規模ですが先生の数は多いので、一人ひとりをしっかり見てくれます。中学生まで送迎バスが利用できる点も安心でしたね。（注）送迎バスは、一部地域で実施

農家とサラリーマンの二足のわらじ

平日は鈴鹿市の企業に勤務、休日に農業をしています。自宅から勤め先までは車で約 1 時間弱ですが、高速道路のインターチェンジも近いため苦になりませんし、出張の多い私は JR の駅が市内にある点もとても助かっています。農業は、最初は大根や白菜作りから始め、今では米作りが主となっています。山間部特有の寒暖差のある気候と、すぐ近くを流れる加太川のきれいな水を使って作るコシヒカリは、甘みが強くておいしいと評判です。毎年 75 ～ 80 俵ほど作りますが、県外の方にもとても人気で、自分たちで食べる分が少なくなることもしばしばです（笑）。おいしい作物が食べられて、周りの人にも喜んでもらえて、農業は楽しくてやめられないですね。

農業は、周りの人の支えがなくてはできません。私の住んでいる地域で農業をしているのはご年配の方ばかりですが、機械を貸してくださったり、畑の近くの空き家を農作業用の家として使わせていただいたりと助けていただいて、本当にありがたいです。代々大切にしてきた土地を貸してくださる方も多く、今では一町五反の畑を管理する地域一番の農家です（笑）。子どもたちにも農作業を体験してほしいと思い、小学校で行う自然薯づくりの実習にも講師として参加しています。

これからの目標は？

子育てがひと段落したので農作業にもっと力を入れていきたいですね。一人だと限界があるので、地域の方や農作業に興味がある人たちなど、いろんな方と一緒に作物を作っていきたいです。特に、亀山市での米作りでは、コシヒカリが向いていると思うのですが、管理が難しいためお年寄りの多いこの地域では避けられがちです。それでも、皆で協力したらおいしいコシヒカリが作れると思うんです。亀山市でできたコシヒカリをブランド米として売り出せたらいいなと思っています。

コンピューター関係の会社員生活を経て農業へ転身した小川忠康さんは、江戸時代から多気町で栽培されている伊勢いもの生産に励んでいる。伝統野菜でありながら農業者の高齢化に伴い、後継者不足に悩まされているだけに地域の期待も大きい。

TAKI
多気町

小川忠康さん
（42 歳）

会社員から伝統野菜づくりの後継者へ

300 年以上の伝統を支えているという自負が励みになっている

「三重県の就農フェアを訪れたら多気町が新規就農者を募集していました。話を聞くと白ネギと柿・伊勢いもの担い手支援に取り組んでいるとのことだったので、せっかくやるのであれば地域の伝統野菜をつくりたいと思い、伊勢いも栽培にチャレンジすることに決めました。」
しかし、伊勢いもは翌年の種芋用に 3 割から 4 割を残さなければならないので出荷できる量が少ない。それに種芋の質が悪ければ良い伊勢いもが栽培できないため、翌年の事を考えると大きさや形が良くてもある程度は種芋にしなければならない。そのあたりのバランスを考えなければならない難しい農業だ。それに手間もかかる。
「伊勢いものつるを絡ませるために竹の棒を畑に挿しているのですが、この棒は全て自分で作ります。だいたい 10 アールの畑で 4000 本必要なので、僕の場合だと 8000 本。山で竹を切り倒して棒状に加工するのですが、ひと月近く山に通っていました。その時は農業でなくて林業をしているような感覚でしたね。」

農業で生活していくために、小さな収入源をいくつか確保する

小川さんは現在、伊勢いもと白ネギを栽培し、JA に出荷している。今後もこの 2 つに絞って経営を安定させることが当面の目標だが、生活全体を支えていくために、農業に関連した副業を増やしていくことも視野に入れている。
「今の家賃は 1 万円 / 月。生活していくには最低でも年間 200 万円くらいは必要だと思いますが、伊勢いもと白ネギ以外の副収入も含めた生活設計を考えていくつもりです。既にラジコンヘリコプターを使った農薬散布や稲刈りのアルバイトをしていますが、期間限定の仕事であればこれからもしていきたいなって思います。そういった働き方の未来が明るければ、どんどん農業の担い手も増えると思いますけどね。」
今のところは小川さんが伊勢いも農家では最年少のようだ。多気町も就農体験会を開催するなどして担い手確保に励んでいる。
「僕も今までは助けていただいてばかりでしたが、これからは協力できることもあると思います。まずは 30 代・40 代の方がたくさん来てくれるように農業で生活できることを示していかなければなりません。伊勢いも栽培だけで子どもを育てられた先輩の話も聞きますので、可能性はゼロではないと思いますよ 」。

初期投資は？

トラクターや農機具、軽トラック、資材（ロープとか）を足していくと 200 万円近くかかりました。
これから先苦労することがわかっているので、できるかぎり安く抑えようとほとんど中古で譲っていただきました。

時間の使い方は？

雨が降っていたり、前日の雨で土がぬかるんでいたりすると作業できない日もあるので、どうしても仕事ができない日があります。
だからプライベートな時間もありますし、会社員に比べても時間を自分でやりくり出来るのでストレスは全くないです。

生まれ育った名古屋市で飲食関係の仕事に従事していた岡山さん。１年間の研修を経て2013年に就農。多気町にあった祖父の農地でトマトを栽培し、５年目になる。

TAKI
多気町

岡山康介さん
（40歳）

人とのつながりを大切に、地域に愛される農業をめざす

心機一転　多気へ移住

就農する前は名古屋市内で飲食店関係の仕事に従事していた。仕事を通して食材に対する興味が深まり、自分で生産したいという気持ちが次第に高まっていった。以前から経営にも興味があったことから、自らが経営者となれる農業をそのチャンスと捉えて、一念発起。就農の決意を固めた。

最初は会社が休みの日に農業について調べ、実際に農家に足を運んで少しずつ情報を収集した。半年間はとにかく貪欲に情報を集めた。そんな時、祖父の農地を管理する必要が生じたことから、多気で農家になろうと決意し、移り住んだ。つくるなら大好きなトマト。そんな強い思いから、農業次世代人材投資事業（旧 青年就農給付金制度）を活用し、町内のベテラントマト農家で１年間、みっちりとノウハウを学んだ。

農業は仲間が大切

「まったく知り合いのいない土地で農業を始めたので、最初は人間関係を築くのが本当に大変でした。出荷先の直売所で農家の方と知り合いになり、そこから少しずつ付き合いが広がりました。仲間は大切だと感じます。」研修でお世話になった農家や先輩たちからの情報やアドバイスは非常に有難い。時にはトラックや農業機械を貸してもらうこともある。「僕の農業はたくさんの人に助けてもらっているんです。」

経験を重ねながら、規模を拡大し、まずは経営を安定させることが目標。「直売なので、売り先の開拓も自分でやらないといけません。サンプルのトマトを持ってレストランなどへも出掛けて行きます。生産も含め、まだまだ試行錯誤です。」前職の経験を色々な場面で生かしながら、地域に愛される農業経営をめざしている。

就農を考えている人へ

自分がやりたい農業をネットで調べ、まずは農家に会いに行って、農家に生の声を聞いてみることをお勧めします。僕自身もトマトについて、かなり事前に調査をし、トマト農家へも通いました。受け身ではなく、積極的に行動することが重要です。

伊勢市でイチゴ農家を営んでいる南圭輔さんは、
妻の絵美さんと 3 人の子ども達と 5 人暮らし。
以前は千葉の農業法人に夫婦で勤務していたが、
イチゴ農家になるため 13 年前に U ターンした。

ISE
伊勢市

南圭輔さん・絵美さん
（40 歳）　（37 歳）

イチゴでたくさんの笑顔をつくりたい

地域のみなさんに支えられたからこそ困難を乗り越えることができた

「東京で開催されていた『新・農業人フェア』で三重県の方に伊勢市がイチゴの産地だと教えていただいたことがきっかけです。それまでイチゴ農家になるためなら全国どこでもいいと思っていたので、生まれ故郷に U ターンしてきたのは本当に偶然です。」
研修先の農家さんたちの協力があって、1 年目からイチゴ栽培に取り組むことになった圭輔さんは、中古のビニルハウスを無償で譲ってもらうことができた。
「解体して移設する作業も研修先の師匠たちに助けていただいたので、初期費用は安くすみました。もし 2 反のビニルハウスと、いちご栽培システムを新設しようと思ったら 2,000 万円から 3,000 万円くらいかかると思いますが、これから始めるという時にそれほどの借金は怖くてできませんよ。」
しかし、ここから想定外の状況に直面した。農地は水はけが悪かった為、ハウスがカビだらけになってしまったというのだ。少しずつ規模を大きくしていくつもりであったが、これ以上この場所で広げることはできないと考えた南さん夫妻は苦渋の決断を下した。
「妻と何度も話し合った結果、状況が変わるまで僕は外に働きに出ることにして、イチゴ栽培は妻が主体となってもらうことにしました。イチゴ農家を諦めるわけにはいきませんでしたし、かといって生活費も稼がなければならないですからね。」そんな状態にピリオドを打つことができたのはやっぱり地域の農家の方々の支えだった。「地域のイチゴ農家さんが亡くなった時に、まわりの農家のみなさんが空いたハウスを僕らに貸してくれるように働きかけてくれました。それがこのハウスです。」その後イチゴの苗が病気で全滅するという悪夢もあって、ようやくイチゴ農家として経営できる状態になったのは 4 年前からだという。
「まわりの農家さんに助けていただいているので続けることができていますが、今思うと本当に困難ばかりでした。」

子育ても農業の一部

就農当初は企業との連携や多品種栽培にチャレンジしたりしながらブランドづくりに励んでいこうと考えていた南さんだが、子どもが生まれてからは子育てそのものを農業に含めて考えるようになったという。
「例えば子どもたちが夕方 5 時、6 時に帰ってくるじゃないですか。そしたら寝かしつけるまでは仕事をせずに家族で一緒にいるようにします。その分、イチゴの箱詰め作業が深夜までかかってしまいますし、子どもの具合や習い事で仕事の予定を変えなければならないこともあります。でも子育てや家のことを大事にしながら働けることが妻とこの仕事を選んだ理由ですから、何とか頑張っています。」

農業に大切なことは？

この仕事は好きじゃないとできませんし続けることができません。
そうした覚悟と強い気持ちを持って前に進んで欲しいなって思います。
それから茨城県でお世話になった師匠から言われたことですが、新規就農するときは信念を持つことが大切です。信念を持っていれば必ず誰かが見てくれていて助けてくれますと。とにかく信念を持つことです。

営業マン生活を経て農家へ転身した倉野佳典さんは、イチゴの栽培に励み６年目である。やる気と結果で地域の信頼を築いていった。

ISE
伊勢市

倉野佳典さん
（36 歳）

イチゴとの出会いで人生が好転
太陽の下で充実した毎日

自己資金１５０万円と空きハウスでイチゴ農家へ

農業とは無縁に育ち、大学で県外へ。卒業後、三重に戻って営業マンになったが、がんばりすぎて体調不良に。派遣やフリーターも経験し、数字で成果を出せば認めてもらえる日常に違和感を覚えていた。

「自分のやりたいこと、役割って何だろう」。自問自答を繰り返す中で、就農を題材にしたテレビ番組を偶然目にした。「人生に疲れ果てていたので、逃げの気持ちも手伝って、農業をやろうと思ったんですね」。最初は安易な考えだったが、生まれ育った土地がイチゴの産地で後継者不足だと知り、挑戦する決意を固め研修先を探した。

イチゴ栽培で見つけた生き甲斐

JA 伊勢いちご部会に入り、積極的に人間関係を築いた。地域の集まりにも参加し、色々な人の話に耳を傾けた。少しずつ増やしていく信頼。栽培は苦労の連続で失敗もある。それでも、「おいしい」と喜んでくれるお客さんの一言は、栽培に成功した喜びにも勝り、何よりも一番うれしい。

イチゴとの出会いで、行き詰まりを感じていた人生が好転した。「失敗はありますが、充実した毎日です」。講演の依頼を受け、体験談を話す機会も増えている。

就農を考えている人へ

自然相手ですから、自分の力ではどうにもできないこともあります。でも、必ず成し遂げるという強い意志と覚悟さえあれば大丈夫。会社勤めと比べると、時間の自由度は高く、つくろうと思えば平日にだってまとまった時間がつくれます。僕はそういう時間を使って研修などに出掛けています。難しく考えすぎないで、まずは、土に触れて太陽の下で農業を感じるというところから始めてみてはどうでしょうか。

エンジニア・高校教員を経て、2005 年に移住した村山邦彦さん。以来１２年に渡って農産物の生産・流通に携わっている。
有機栽培に取り組む生産法人・伊賀ベジタブルファーム㈱、産地卸売販売会社・㈱へんこ、両社の代表取締役を務める。

IGA
伊賀市

村山邦彦さん
（45 歳）

脱サラ新規就農
～地域課題解決のために農業ベンチャーを設立

「自立と共生」を掲げて移住・就農～地域のオーガニック推進に取り組む。

伊賀市・名張市周辺は古くから有機農業に関わる人が多い地域だ。東京の産業機械メーカー勤務など安定した職業を離れ、就農の地を探していた村山邦彦さんも、人の縁を辿って伊賀市に移住、地域の篤農家の下での研修を経て 2007 年に独立を果たした。
「あとから考えると農地の条件等、かなり不利な地域だと思いますが、個性的で面白い人たちが各地から集まっていたので、何よりそこに惹きつけられたのだと思います」
自らの農業経営が徐々に軌道に乗ってきた 2010 年、同じように伊賀に惹きつけられた移住者や地元農家らと共に「伊賀有機農業推進協議会（以下『伊有協』）」の立ち上げに加わる。
「伊賀の有機農家には“へんこ”（関西弁で“頑固で変わった人”の意）が多くて、みんな本当に個性的で尖がっている。そして、それぞれ独自のネットワークを持っているんですね。『伊有協』の運営は、その多様なネットワークを可視化して繋いでいく作業だったと思います。すごく勉強になったし、これからの時代のローカル・コミュニティを考えるための大きなヒントになりました。一人ひとりが小さくても経営者として自立しながら、大きな課題に向かって連携して扶けあう、そんな形がしっくり来たのでしょうね。」

ローカル・ベンチャーを設立～農業の新しいかたちを創る

村山さんは就農から５年目に農場を法人化（伊賀ベジタブルファーム㈱）。その約１年半後には協議会の有志らと地域の農産物流通の新しい形を創る商社（㈱へんこ）を設立した。いずれも既存の農業のイメージに囚われず、次の時代を担う新たな枠組をつくるための挑戦だった。
「周囲に全然理解されず苦労は多かったけど、時代が追いついてきたというか、ようやく僕らのやってきたことが評価されるようになってきました。」
そんな風に言う村山さん、今は伊賀を拠点に各地を飛び回り、次代の農業を立ち上げるための仕掛けづくりに奮闘している。その神出鬼没ぶりはまるで忍者のようだ。
「農や食の世界には若くてやる気のある人たちがどんどん入ってきている。田舎だからってタコツボに収まらず、各地で本当に良いものを創っている人たち同士が繋がっていけば、新しい世界が拓けていくと思うんです。そんなネットワークが広がるための『ボンド』みたいな役割ができたらいいな、と。」
Think Globally, Act Locally そんな言葉を地で行く、新しい形の「移住」のヒントがありそうだ。

これからの農家は？

単に農産物を生産するのではなく、暮らしの中の「食」のあり方を提案し、自分を取り巻く自然環境や人の繋がり、多様な「いのち」のあり方に心を配る、そんなライフスタイルが【オーガニック】だと思っています。そういう感覚が徐々に「当たり前」になっていく時代の流れのなかで、ローカルの果たす役割はとても大きいんじゃないでしょうか。志の高い移住者の役割はこれからますます重要になりそうですね。

▶伊賀ベジタブルファーム株式会社 ｜ http://iga-vegetable.jp

伊賀有機農業推進協議会をクリエイティブな感性で盛り上げようと奮闘しているのが伊賀 市在住の奥田悠史（ゆうじ）さんだ。昨年フリーランスになり、イラストレーターの奥様と 生まれ故郷に U ターンした。
Alpenglow works | WWW.alpenglow-w.com

IGA
伊賀市

奥田悠史さん
（29 歳）

農学部卒業のデザイナー だからこそできることがある

古民家をゲストハウスとして運営するつもりで U ターン

長野県の大学を卒業後、ライターとして地元企業に勤めながら長野暮らしを楽しんでいた。生まれ故郷の三重県には時々帰省する程度でそれ以上の関わりは無かったが、母親が代表を務める NPO 法人が管理する古民家の活用について提案したところ、ぜひ実現しようとまわりが動き出したため、三重県を意識しはじめたという。

「実姉が自然食品の専門店やオーガニックカフェを運営しているので、古民家宿ができれば人もモノも循環できるし、プロモーション効果も大きくなると考えました。それに大学では農学部の森林科学科だったので、木のことをたくさんの方に伝えるプラットフォーム にできたらいいなと。人が安らぐ場所を作りたかったんですよ。」

しかし故郷への U ターンを決意し、退職までした直後に古民家が人の手に渡ってしま い、構想を実現する道が絶たれてしまった。

「残念でしたけど、色々な人とのつながりでまた実現できるはずと思っています。とはいえ会社も辞めて、いまさら後戻りもできないので、結局そのまま三重県に引っ越すこと にしました。長野での仕事もしているので 2 地域居住みたいな生活ですけど。」

奥田さんが三重県への U ターンを決断した後にまず最初にしたことは、暮らしの支出をいかに抑えるかを考えることだった。

「デザイナーとしての独立と移住が同時期だったので不安もありました。貯蓄もわずかでしたしね。それでも収入と支出のバランスが取れれば何とかなると思って、少ない貯金で井戸付きの中古住宅を購入しました。思い切った決断でしたが、安価な家であれば家賃を払い続けるより負担をかなり減らすことができますからね。それからデザイナーとして独立してからもすぐに仕事ができるよう、収入があるうちに高価な機材類を揃えておいたというのもかなり効きました。独立後はしばらく現金収入がありませんから。」

農村にもクリエイターが来て欲しい

「この地域でデザインを仕事にしながら生活している人がいなければ、大阪でデザイン を学んで戻って来るって人もいないんじゃないかって思うんですよ。農業も飲食業も同じ で、誰もうまくいっていない地域に行くには相当の覚悟が必要です。年金で何とか生きてますっていうおじいちゃんやおばあちゃん達ばかりの農村には入りたいって思わないですからね。やっぱりそれぞれの世代で頑張っている人がいるから人は育つし、相互に仕事を 出し合うこともできるようになります。

これから僕の下の世代が周りに増えたら、全力で仕事を紹介したいなって思います。実際に仕事は手一杯の状態なので、同年代くらいの方がいたら頼もしいですね。この 地域には飲食店さんや農家さんがたくさんいるので、若いクリエイターがどんどん来て欲 しいなあって思います。

移住の心構えは？

どっぷり農村に入る場合は区費や出合いみたいなことですかね。そういった地域活動が難しい場合は住宅地が良いかもしれません。僕の場合は仕事で地域活動に参加できない日が多いのですが、区長さんが理解してくれていているのですごく暮らしやすいです。でも地域によっては、神社費や出会（寄合）などそれぞれの地域で決まりごとなどもあります。そのあたりのことは、実際に地域に入ってみないと分からないことだったりするので難しいですよね。

2011年に兵庫県西宮市から伊賀市に移住した田公邦明さんは、高齢のため維持できなくなったぶどう畑を引き継ぎ、巨峰と安芸クイーンを中心とするぶどう農家として独立を果たした。

IGA
伊賀市

田公邦明さん
（38歳）

ゴルフショップ店長から ぶどう農家へ

テレビの特集番組がきっかけで農業へ

「ゴルフショップの店長をしていましたが、自分でつくったものを売りたかったし、独立したいという気持ちがありました。そんな時にテレビで農業の特集番組を見ていたら、農業だったらできるかもしれない・独立しても大丈夫かもって思ったんです。今思えば、結構安易だったかもしれませんね（笑）」
現在、田公さんは甲子園球場のグラウンド部分とほぼ同じ広さのぶどう畑を借りている。「ぶどう栽培は思っていた以上に手間がかかりますが、割とハマりやすい性格ですし、ひとりで黙々と作業することは嫌いではないので苦ではありません。でも2年目に収穫前のぶどうが1日で100房ほどアライグマに落とされてしまったのですが、そのときは落ち込みました。今では電気柵をまわりに張り巡らせているので、被害はなくなりましたけどね。」

小房ぶどうの栽培に挑戦中

「ぶどうの種類は1万種類ほどあると言われていて、どれも個性的で味も形も全然違います。青りんごや梨のような味のぶどうもありますし、ハート型とか桃の形もあるんですよ。でも実際にスーパーで買えるものは10種類もないかなというくらいです。たまに珍しい品種のぶどうが売っていたとしても1房4～5,000円で売られていたりするので、手軽に買えるようなものでもありません。だったら、できるかぎり栽培の手間を省き、低価格のぶどうを多品種販売できたら喜んでもらえるんじゃないかと思って、1房あたりの粒を少なくした小房ぶどうに挑戦したんです。間引く作業を一切せずに済みますし、見た目も小さく可愛らしい上に味も凝縮していておいしい。これならいけるんじゃないかなって期待しています。」
この「小房ぶどう」、既に岡山県で実証されているようだが、三重県内では前例はまだない。しかし田公さんの熱意で、たくさんの品種の「小房ぶどう」が手軽に買える日も決して遠くはないはずだ。

農村移住を目指している方に

ぶどう棚だけが残っている耕作放棄地も増えていますし紹介できる畑もありますので、興味があればぜひ来ていただければと思います。ぶどう栽培が軌道に乗るまで3年くらいはかかりますが、その間、野菜をつくっても良いですし、伊賀は工場が多いのでアルバイトすることだって可能です。伊賀は住みやすいところですよ。

農村で働くポイント

①移住する際にお金は多少必要だとは思います。
僕は1・2年収入がなくても何とかやっていけるだけのお金を貯めていました。

②地域の行事にはできるかぎり出るようにしています。
近所付き合いとか割と苦手な方なんで特に意識していることはないのですが、全部断ったらさすがに暮らしづらくなるだろうし。

③住民票は最近移しました。
伊賀で色々とお世話になっているので、きちんと税金を収めなければいけないなと思います。

横浜市から伊賀市に移住した横田正和さんは、神奈川県出身の妻：未佑（みゆ）さんと長女珠那（しゅな）ちゃんの３人暮らし。
新規就農者として三重県や伊賀市の支援を得ながら、今年から農家として独立を果たした。

IGA
伊賀市

横田正和さん
（44 歳）

自然環境も教育環境も都会より贅沢な暮らし

子どもの教育環境は都会に劣っていない

「保育所に通っている娘の同級生は 12 人。都会に比べたら圧倒的に少ないですよね。でもいわゆるマンモス学校に通っていた私たちに友達が多いかっていうとそんなことはない。逆に同学年が少ないから年齢問わず一緒に遊んでくれるし勉強も教えてくれる。大人になっても仲が良い。この辺りのおじいちゃんやおばあちゃんがお互いを「○○ちゃん」って呼び合っている姿を見ると羨ましいですよね。」
確かに田舎では、学年の隔たりなく遊んでいる子どもたちをよく見かける。少ない人数だからこそ助け合わなければならない状況もあるだろうし、先生との距離感も近い。だから教育環境が都会に比べて劣っているとは感じないと正和さんは言う。自宅の庭には野生のキツネが手の届くところまで近くに来たことがあるという。子どもが野生の動物と出会う経験を得られることも田舎の魅力だ。

これからの夢

現在、正和さんはコメを含めて２３もの作物を栽培している。やっぱり子どもには自分の作った野菜を食べさせたいという思いがあるので、とりあえず色々な種類をつくっているのだとか。ただ、もち米は近所の直売所の販売部長さんが心配してくれて、「作ったら全部買うから、もち米を作れ」と申し出てくれたので今年から栽培を始めた。
「ずっと放置されていた場所で肥料も使っていないのですが、大きくなりすぎて倒れてしまうんじゃないかと心配になるほど順調です。」
「まだ県の担当者の方に色々と教えていただいている段階ですが、母屋が１棟空いているので農家民宿のようなこともしてみたいと思っています。かつて島ヶ原というところは宿場町だったようですし、昔のようにたくさんの人が泊まりに来るようなまちにできればなと。」
未佑さんは製菓の専門学校を卒業したこともあり、伊賀米の米粉を使った洋菓子を提供できたらと考えている。近い将来、横田さん夫妻がつくる美味しい農作物とお菓子を楽しむことができる宿が登場するかもしれない。
「とにかく自分たちが成功モデルになって、後から来る人が安心して生活できるようにしていきたいですね。こんないいところないですから。」

伊賀市に決めた理由は？

就農フェアで出会った伊賀市の農家さんを家族で訪ねた際に食べさせていただいた野菜が、本当に美味しくて衝撃を受けました。妻もすぐに気に入り、それからまもなくして家族での移住生活が始まりました。

結婚を機に夫婦で就農を決めた森さん夫妻。
夫は伊賀市の農業法人で、妻はブドウ農家で働いている。
夢は一人息子に「農業ってかっこいい」と思ってもらうこと。

IGA
伊賀市

森 大輔さん・華子さん
（35 歳）　（33 歳）

農業法人への就職とブドウ畑、夫婦二人三脚それぞれの農業

働くことの原点は、自然の中で汗を流すこと

兵庫県でサラリーマンをしていた夫と、実家が農家の妻。結婚前、大輔さんは華子さんの実家に遊びに来るようになり、「自然の中で汗を流すのは、働くことの原点」と感じるようになった。大輔さんはサラリーマンとしての自分に将来性はないと思い、結婚を機に退職し、就農を決意。ほとんどノープランで名張に移り住んだ。
大輔さんは伊賀市で主に水稲を営む農業法人に研修で来ないかと誘われ、そのまま就職。華子さんは「この人のやる農業なら必ず成功する。自分も農業をやろう。」と、下積みのつもりでブドウ農家での研修を始め、跡継ぎがいないからと、2年足らずでブドウ畑を任されるようになった。現在はナバナなどの露地野菜もつくり、直売所へ出荷している。

同じ農業でも“職場”は別々

農業を身近に育った華子さんと違い、土とは無縁の環境で育った大輔さんは「理想と現実の差は大きい」と、痛感。思っていた以上に作業に手間取り、もどかしく感じたこともあった。それでも作業をしている畑で朝日や夕日を見ると、「自分のやりたかったことはこれだ」と実感し、また土と向き合う。
大輔さんは会社で学んだことを妻の農業に生かし、出勤前や帰宅後には、華子さんの作業を手伝うこともある。「夫婦が同じ場所で農業をしていないことが、いいんです。」2人の夢は1人息子の雄大君に「農業ってカッコいい」と思ってもらうことだ。

就農を考えている人へ

農業は中途半端な気持ちでは続きません。現役の人からできるだけ話を聴いて、それでもやりたいと思えるのなら大丈夫。（大輔）
農業はひとりでは絶対にできません。地域の人の協力を得ることも大切です。（華子）

震災の影響で地元福島県での就農を諦め、避難生活をしていた鯨岡恵さん。避難先で開催された「新・農業人フェア」を訪ね、興味のあった有機大玉トマトを栽培しているところを聞いて回っていたところ、現在のお師匠さんを紹介され、三重県名張市で有機農業をスタートさせた。

NABARI
名張市

鯨岡恵さん
（35 歳）

東日本大震災の避難生活を経て有機農業をスタート

最低でも 200 ～ 300 万円の貯金が必要

鯨岡さんはトマトとパプリカを施設栽培しているが、どの程度のお金が必要なのだろうか。

「ビニールハウスやトラクター、保存用冷蔵庫等は無利子の融資などを上手に活用すれば、経営開始当初の自己資金は少なくても購入できるのですが、コンテナや支柱・ホース・はかりみたいな消耗品は全て自己資金を準備しなければならないので、積み上げていくとそれなりの金額になります。そういうものだけでも初年度に 100 万円以上はかかりますね。それ以外に生活費もかかりますから、200 ～ 300 万円くらいは少なくても必要です。私は避難生活で貯金を使い果たしてしまっていたので、どうしようかなと途方にくれたこともありましたが、おかげさまで何とかやってます。」

有機のパプリカ農家になりたい

鯨岡さんにこれからのことを尋ねると、パプリカの栽培技術を向上させたいとのこと。有機でパプリカを出している農家が近くにはいないため、収量と品質を高めていければ大きな強みになる。しかし当初からメインに取り組んでいるトマト栽培と作業時期が被るので、手間をかけようと思うと実際には大変のようだ。

「大玉トマトの栽培は、師匠のおかげで 1 年目からうまくいったのですが、パプリカは 1 年目がアブラムシで翌年はダニ、そして今年は生理障害が原因の尻腐れ果に悩まされました。今夏の異常な暑さが原因でもありますが、負けてはいられません。それに働くサイクルが次第にわかってきたので、仕事の効率自体は良くなってきました。ゆっくりですが進歩していると思います。」

鯨岡さんは師匠同様、畑を綺麗にすることには気を使っている。農地を借りている以上、それは当然のことなのかもしれないが、地域の方の信頼を得るためにはこうした日々の積み重ねが大切なのかもしれない。実際、鯨岡さんに畑を使わないかと地域の方から申し出ていただけるようになってきたそうだ。

「地元の先輩方にはそんないい加減なことを言ったらダメだと言われますけど、農業はやってみないとわからないこともあるので、まずはたくさんの人に体験してほしいです。」

自慢のトラクターは 230 万円くらいで購入。既にトラクターを公道で走らせる大型特殊免許（農耕車に限る）は取得していたが、三重県に来るまで畑で走ったことはなかったという。今では年間 100 時間以上運転している。

販売先の開拓は？

師匠と出会った際に大手の事業者さんとお付き合いがあるかどうかを尋ねました。今では仲間に入れていただいて大切な収入源となっています。知らない土地で就農するなら、そういった販売ネットワークを持つ研修先を選ぶことも大切だと思います。

県内屈指の透明度を誇る銚子川のほとりで『紀伊ファーム』を営んでいるのが紀北町長島在住の石倉至さんだ。今年でUターン7年目の専業農家として露地野菜を中心に手がけている。

KIHOKU
紀北町

石倉至さん
（38歳）

生まれ故郷で新規就農

とにかく「勢い」で始めた農業

石倉さんは大学卒業後、神奈川県でサラリーマン生活を送っていたが、大学が農学部だったこともあり農業への興味を抱き続けていた。
最初は農業ボランティアの情報を収集しようとネットで調べていたが、アメリカでの農業研修を綴ったブログを見つけて「これだ！」と思ったという。
「一週間後には海外研修の申し込みをして、仕事も辞めました。」約1年半の海外研修を終え、農業をするなら生まれ故郷である三重県でと思い、県内の農業法人で働き始めた。さすがにこの時ばかりはこのまま農業の道を歩んで良いのかなと悩んだそうだが「そのあとは勢いです（笑）」というようにとにかく前へ進んできた。しかし三重県で農業をしようと決心したものの、その後の農地探しは苦労した。「当初、農地探しはそれほど難しくないと思っていました。田畑は余っていると聞いていましたし。でも県内を順に聞いて回ったのですが、どこの骨の者かわからない若者になかなか貸してくれませんでした。時々、農地を売りたいというお話はいただいたりしていたのですが、さすがに最初からそこまで手を出せませんでした ね。結局、生まれ故郷の紀北町で偶然にも今の農地を紹介していただけたのですが、台風も多いし農業には厳 しいだろうなと思いました。でもまあ環境的にも気持ちの良いところだし実家にも近いし、やってみてダメだ ったらまた他で探せばいいだろうくらいにとりあえず始めてみたんです。」
石倉さんは現在、契約栽培を中心に展開している。京都の事業者から依頼されているサラダカボチャと地元 の黒ニンニクメーカーに卸しているニンニクだ。当初は地元直売所に置いてもらえるよう、少量ずつたくさんの品目の野菜も栽培していましたが、台風による被害や、大量出荷する契約栽培の品目との両立の面から、良い品質を維持することができなくなってしまいました。結局、安定的に農業を続けるため、契約栽培の2品目に加え、台風の被害の小さいサツマイモと地元の伝統的な漬物『くき漬け』の材料となる八頭（ヤツガシラ）の4品目に絞ることにしました。

自社ブランドでの加工・販売へ

安定的な農業経営をめざしている石倉さんは加工にも力を注いでいる。「元漁師の父親が使っていた水産加 工場を農産物加工場として活用しているのですが、地元の特産品である「くき漬け」づくりも離乳食用に依頼される八 頭や人参のペーストづくりも自分でしています。現在 6 品種育てているサツマイモ全てを使った干し芋の開発にも取り組んでいます。色も味も違う干し芋の詰め合わせができたら面白いかなと」
石倉さんのこうした発想や事業感覚に影響を与えているのが、紀北町で年に4回開催している「海・山こだ わり市」のメンバーたちだ。町が主催していたリーダー研修で出会ったそうだが、みんなIターン・Uターン者。「それぞれ思いをしっかり持っていて、目標があって、経営者としての視点を持っているので話が合います。実際にみなさん成果も上げているし、思いを形にしている方ばかりなので良い勉強になります。もし一人で農業し ていたら今頃諦めていたかもしれないですね。」
サラリーマン時代は大抵の仕事は一人でできたし自信もあったが、いざ農業を始めてみると一人でできることの限界を思い知ったという。逆に考えると、人とのご縁が広がればできることがますます増えてくるということかもしれない。
今後は更に収量を増やしていくとともに、加工品を安定させたいと考えている石倉さん。
去年まではこのままでは厳しいかなと感じていたようだが、ようやく見通しを立てられるようになり、人手も足りなくなってきているようだ。
これからの活躍が楽しみな農業者のひとりである。

2009年に愛知県から紀北町に移住し、全く経験のなかった農業の世界へ飛び込んだ。
以来、トマト栽培を中心に展開し、伊勢志摩サミットでは完熟トマトとトマトジュースが採用された。株式会社デアルケ代表。

KIHOKU
紀北町

岩本修さん
（31歳）

トマトの施設栽培で満足な生活を実現

農業はストレスフリー

「両親も兄もみんな会社経営しているので、僕も自営業タイプです。人の言うこと聞けないですし、団体行動も無理です（笑）。だから農業はいいですね。ストレスフリーです。」
しかし当初は農地探しがなかなか思うようにいかず、結局、父親が購入していた宅地で始めることになった。勉強会に参加したり農家に指導してもらいながら、草刈から整地、ハウスづくりまで自らの手で行った。
「機械系の仕事をしていた親父を学生時代には手伝っていたので、ハウスを作ることもそれほど苦ではありませんでした。でも自分ですると余計にお金がかかったりするんですよね。やり直しも多いから人件費が高くつく。でもその分、技術は身につきました。」

農業は地域に求められている仕事

農業をビジネスとして考えると、とても割に合わないと岩本さんは言う。ではどうして農業をしているのだろうか。
「農業をしているだけで褒められます。「頑張ってるな！」って。それだけ地域に求められている仕事なんです。そこに価値観を感じる人でないと難しいんじゃないかな。けど生活費は稼がないといけないので家族からは嫌われる仕事です。社会からは喜ばれますが、家族からしてみたらもっと稼いできてくれってことです。」
今後のことを尋ねると、結局、求められることをやっていくしかないんだろうなと思っているとのこと。
「最近子どもができてからは今の暮らしに満足してきちゃったので、これから借金までして新しいことをしなくてもいいかなって思い始めています。」

経営者には移住してきた従業員と地域とを繋ぐ責任がある

岩本さんは、雇っている若い従業員を地域のイベントや祭りに連れていったりしながら、人と人とのつながりづくりに配慮している。
「機会があれば手伝いや出店をさせたりしています。そうしないと地域とのコミュニケーションがありません。僕は代表者として色々な会議に呼ばれるので仲間がたくさんできますけど、従業員は本当に交流する機会がありません。
それに地元は地元のコミュニティが既にあるので、移住者の方から積極的にいい顔しながら入っていかないと仲良くなれません。だから僕もかなりいい顔しています（笑）。」

地域と仲良くするコツは？

例えば僕が紀北町に越してきて最初にしたことは中古の古ぼけた軽トラを買ったことですが、最初から新車の軽トラでかっこよく農業しようと思っているとみんなにそっぽ向かれるんじゃないですか。
泥にまみれて朝から晩まで一人でずっと仕事していたら次の日には近所のおじいさん、おばあさんが覗きに来てくれて、次第に買いに来てくれるようになります。

熊野川流域の中山間地で有機農業に取り組んでいる大阪府出身の村瀬和孝さん。この地で３年間、地域おこし協力隊として活動した後、そのまま定住することを決心した。

KUMANO
熊野市

村瀬和孝さん
（40 歳）

地域おこし協力隊の活動地域に定住して有機農業

農業は地域とのつながりがないと難しい

千葉で有機農業をしている友人を手伝いながら技術を学び、就農することを考え始めた村瀬さんだが、実際には地域とつながりがないと難しいことを知ったという。

「だからといって今から農業大学みたいなところに通うのも大変だなって思っていたので、地域おこし協力隊を選択しました。」

三重県熊野市に協力隊として就任後、ニンジンジュースの製造や観光スポットになればとレンコンづくりなどに取り組んだ。

「僕はサーフィンが好きなので、海に近いということも熊野を選んだ理由の一つです。農業しながらサーフィンもできる環境って最高ですからね。でも実際にこっちで暮らしてみると川がものすごく良い。畑の目の前に熊野川が流れていますが、夏は毎日、川で体を冷やしていましたね。」豊かな水をたたえる熊野川。度々水害にも悩まされるが、そうした自然条件で堆積してきた土壌は肥沃で微生物も豊富だと、村瀬さんはこの土地での農業に期待を持っている。

自分の暮らしは自分でつくる

村瀬さんは協力隊活動中に出会った奥さまの千慧（ちさと）さんと３歳の男の子の３人で暮らしている。地域に同年代の子どもは少ないが、そのかわり友達同士のつながりは深い。当然、親同士のつながりも同時に深まり、お互いに支えあうような関係づくりができているという。

「遊び仲間の家族同士で自主保育をしています。週に１回、４世帯で家を持ち回りしながら昼ごはんを一緒に食べて遊んでいます。そういった環境があるので保育園に小さい時から預けなくてもいいかなって思います。」

都会と同じような暮らしはできないが、人とのつながりを身近に感じながら自分の暮らしをつくっていくことができるのが農村の魅力だ。

よそ者を受け入れることは地域の人たちにも時間が必要

それでは移住先はどのように決めればよいのだろうか。

「その土地が自分に合うかどうかは行ってみないとわかりません。だから気になるところがあれば、まずは行くことが先決です。」

反対にその土地の人も見ず知らずの人を受け入れるためには、良い人かどうかを見極める時間が必要なんだと村瀬さんは教えてくれた。

「そういう意味でも協力隊の活動期間は、自分にとっても地域にとっても必要な時間なのかもしれませんね。」

就農するための費用は？

そんなには必要ないと思います。１００万円とか１５０万円とか。
軽トラも最初１０万円でしたし、農機具は最小限で揃えましたね。

今後は、干し野菜やピクルスみたいな商品や、野菜のお弁当をつくって売ろうかなって考えています。
この辺でご飯食べようかって思っても困るときがあるので。

熊野市でみかん農家として独立７年目を迎えた鈴木翔さん。三重県四日市で生まれ育ち、農業を志そうと北海道の大学へ進学。卒業後は地元で就農しようと三重へ戻った。

KUMANO
熊野市

鈴木翔さん
（34 歳）

大学卒業後に みかん農家へ新規就農

三重南紀元気なみかんの里創生プロジェクト（P41 参照）に参加

「熊野にはそれまで縁もゆかりもありませんでしたが、就農するなら果樹をしたいと考えていたので、みかん農家は理想でした。それに蓄えも限りがあったので、初期投資が抑えられる点はありがたかったです。みかんの木も最初からありましたし、維持管理はほぼ手作業ですから大きな機械も必要ありません。とはいえ 200 ～ 300 万円は必要です。」

みかん農家の下で１年間研修後、鈴木さんは独立することができたが、意外にも一番苦労したことは住まい探しだったと言う。

「最初の２年間は熊野市の移住支援住宅で暮らしていましたが、その後の住まいがなかなか見つかりませんでした。だから何とか研修先の農家さんから今の家をご紹介してもらえたときはホッとしました。」

やはりこういう時に頼りになるのは地元の方なのだろう。

鈴木さんは当初、大規模農園を目指してたくさんの農園を借りていたが、実際にはじめてみると経費が想像以上に膨らんだ。そんな経験から今では一人で成立するみかん農家へと舵を切っている。

「最初は早く大きくしてそれなりの利益を上げたいって焦っていたところがありました。でも、焦ったところでいいことはありません。みかん農家ってやり方次第では何とかなると思っていますし、実際、この地域の方でも続けている方はいますからね。」

移住する前に土地の暮らしに触れてみること

これから移住を検討する際に気をつけるべき点はどんなことだろうか。

「人間関係や地域参加とか、田舎暮らしって都会とは違う大変さもあります。そういうことを事前に知っていたり、経験しておいたほうが良いかなと思いますが、そういった生活のイメージって事前になかなかできませんよね。どういう人が住んでいるのかとか、どういう地域性なのかということは暮らしてみないとわからない部分ですから。だから、事前に訪れてアルバイトしながら考えるくらいの余裕があると良いのではないでしょうか。」

アルバイトではないが、県内各地域で就農体験や田舎暮らし体験が開催されている。その土地の雰囲気や生活に直に触れることができるという意味では貴重な機会だ。新しい土地に移住するなら、できるかぎり参加してみることがまずは大切なのかもしれない。

移住を成功させるコツは？

移住や就農に何を求めるかってことを良く考えることだと思います。
ほんと急がんほうがいいと思いますよ。僕らは結構急いでいたというか
焦っていたというところもありましたが、焦っても良いことはありません。

“年中みかんのとれるまち”として県内でも有数のみかん産地に新規就農者として移住した仲井照清さん。勤めていた会社の早期退職制度が契機となって、全く別の道を歩もうと農業に転身することを決意した。

MIHAMA
御浜町

仲井照清さん
（47歳）

22年間続けた会社員生活から心機一転

農業は楽しみながらやっているからこそできる

御浜町に移住して２年、仲井さんは自宅の庭に植えた苗木も入れて約９反の農園でみかんを栽培している。種類も極早生と早生みかん・ポンカン・不知火（しらぬい）、はるみ、カラマンダリンと豊富だ。

「手間暇はかかりますけど朝から夜中まで働き詰めってことはないです。夏場も摘果作業がありますが、週に１日くらいは暑いですから休みますし、どちらかというと私は趣味感覚で農業をしている感じです。サラリーマン的な感覚で農業していると辛いでしょうね。」

自営農業は全て自己責任というプレッシャーがあるが、楽しみながらやっているからこそできると仲井さんは話す。

「私はだいたい９月半ばから採り始めて１３トン出荷できました。規模についても最初小さいかなと思いましたけど、ちょうどいいくらいですね。」

現在、極早生だけでなく取引単価が比較的高い中晩柑に移行している段階とのことなので、苗木が順調に育てば更に安定させることができるという。

海釣りも渓流釣りもできる環境で農業

「農業でいきなり稼ぐことは人脈もない中では難しいので、一旦は会社員生活を経験してからでも遅くはありません。私も体力の心配をされることがありますが、全くそんなことはないです（笑）。」

高齢化に伴いみかん農家を引退される方も増えてきているため、良い園地が借りやすくなっているという。新規就農者にとっては参入しやすい状況であることは間違いない。

「それに太平洋が目の前ですからね。毎朝、畑仕事に行く前に釣りに行けますし、釣り好きの人にとっては良い環境ですよ。山も近いから渓流釣りに行くことだってできます。」

収入はどのくらい？

就農する前に地元の先輩から、贅沢はできないけど普通の生活であればできると言われました。大規模農園を経営されている方も、中程度の方でも同じように話していたので、よっぽどのことがないかぎり大丈夫なのかなと思います。

就農するための費用は？

だいたい15万円/月。月に２・３回大阪に遊びに行ってそのくらいです。就農するための初期投資は軽トラや噴霧器など諸々買って８０万円くらい。でも翌年すぐに収入があるわけではないので２年間分の生活費はあったほうがいいですね。

貨物船の航海士を経てみかん農家へ転身した古川昭義さんは実家のみかん農家に就農して11年目となる。静岡の三ヶ日町で２年半の農業研修をして、御浜町に帰ってきた。

MIHAMA
御浜町

古川昭義さん
（32歳）

一等航海士からみかん農家へと転身
めざせ！もうかる農業

海から丘へ、心機一転

農家の長男として育ったが継ぐ意志はなく、地元を出たいと鳥羽商専へ進学。卒業後、東京の船会社に勤めた。仕事はうまくいっていたが、海の上の生活を続けているうちに、「自分のやりたいことはこれだったのかな」と自問自答を繰り返すうち、「御浜に戻って売れるみかんをつくりたい」という結論に達した。

実は父親も婿養子として１ターンをした人だった。「みかんを育てたい。畑を貸してほしい。」と頼み込んだ。静岡県の浜松市（当時の三ヶ日町）で農業研修を受けてから、生まれ育った御浜町に戻り就農。しかし、そう簡単に売れるみかんはつくれなかった。収入がほとんどない暮らし。農業次世代人材投資資金（旧青年就農給付金）の補助を受け、最初の１年は父から肥料など必要なものを譲ってもらい、会社勤めの妻にも支えてもらっていた。

農業は仲間がいることが何よりも大切

まずはみかんをしっかり作ろうと、部会などには参加せず、人付き合いも殆どしなかった。だがこのままだと、独りぼっちになってしまうと考えを改め、若手農家の青少年クラブに入り、情報交換や勉強会などに参加するようになった。みかんという共通点がある仲間が居るのは心強い。

目標は明確だ。売れるみかんをつくって儲けたい。平凡な田舎暮らしをしたいとも思ってもいないし、土地を代々守っていきたいという考えもない。「いつかはアメ車で畑に行きたいですね」。２児の父親でもある。

就農を考えている人へ

農業は自分のがんばりが報われる仕事です。
まずは全国の農家を調べてみてください。みかん農家としてやるなら
３～５年は収入が無いかもしれませんが、そこをがんばってください。

みかん農家を営んでいる岩崎和広さんは、もともと母方の実家が紀宝町だったことから、子どもの頃からよく遊びに来ていた。海にも山にも近いこの地に憧れみたいなものがあって、いつかはここで生活したいと思っていたという。

KIHOU
紀宝町

岩崎和広さん
（47 歳）

おばあちゃんの残してくれた土地で

地域全体をみかんのブランド産地にしたい

「今まで農業とは無縁でしたが、このあたりにおばあちゃんが残した土地やみかんの木があったりしたので、近い将来みかんを売りながら生活できるといいなあなんてもの凄く浅はかな気持ちで来ました。でもこのあたりの仕事は選択肢が少なかったので、だったらという感じでみかん農家をしてみたんです。そしたら 1 年間の収入が 40 万円くらいでこりゃダメだと。」
岩崎さんはこの時点で一度みかん農家を中断して、農業の勉強ができるかもしれないと思い JA に転職したが、新規就農者への給付金制度が始まることがきっかけとなって本格的にみかん農家の世界へ飛び込んだ。親戚も比較的多いため、園地探しも空いているところをすぐに紹介してもらえた。
「これからはどこも担い手不足ですから、園地を貸してくれるところは増えてくると思います。自治体も『三重南紀元気なみかんの里創生プロジェクト協議会』（P33 参照）を設置し、みかんの新規就農者を募集していますから園地も紹介してくれますしね。でも栽培技術は自分で経験を積んでいかなければなりません。地域のみんなが上手にみかんを作れるようになれば地域全体がブランド産地になってみんなが潤っていくはずなので、僕は自分で試してみて良かったことは若い人たちに伝えています。」

これからの農家は売ることもプロフェッショナルに

岩崎さんは積極的に売り先の新規開拓に取り組んでいる。
「インターネット販売で個人客を増やしていくという考え方もありますが、箱詰めや発送作業でどうしても人手が必要になります。それではせっかくの利幅も小さくなってしまいますので、何とかひとりで完結する仕組みを作りたかった。そこで、市場にいる友人に助けてもらいながら、このあたりの大手スーパーに直接コンテナで卸すことができる関係を築いてきました。そうすれば箱詰めや発送作業の手間も省けるし、市場を通さないので手数料もいりません。これからは急な依頼でも対応できるように同世代の農家と協力体制をつくっていくつもりです。」

読んでいる人へメッセージ

物価は都会と比べて安く、月額 20 万あるかないかでも十分生活できます。農業を応援してくれる人もたくさんいますし、やる気があれば何とかなるとは思いますが、最後は気持ちではないでしょうか。若い子が来てくれることは地域の方々も大歓迎してくれるはずなので、ぜひ思い切って来て欲しいです。

『農業・農村資源を活用したビジネスプラン』の実証活動

平成 28 年夏、若き農村移住者の皆さんから、農業・農村資源を活用したビジネスプランのアイデアを広く募集し、採択させていただいた 3 件のモデルによる実証活動を平成 28 年度に支援しました。

「株式会社いのさん農園」　代表　岡田　孝幸さん【津市白山町】

大学で物質化学を学び、卒業後東京でサラリーマンを経験してから故郷にUターンした岡田さん。大学時代の友人の実家で、さくらんぼ農家の魅力にふれ、農業に興味を持つようになりました。

ご家族が経営する温泉宿泊施設を訪れるお客様に、津市白山町の自然の中でもっと楽しんでもらいたいと、平成 21 年にブルーベリーの観光農園をオープン。学生時代に学んだ化学の知識を生かし、養液を独自開発してポット栽培を行っています。平成 27 年には、通年の雇用をめざして、イチゴの観光農園もスタートさせました。

また、白山町の名物となるようなお土産物づくりをめざし、国から「農商工等連携事業計画」および六次産業化・地産地消法に基づく「総合化事業計画」の認定を受け、自社農園で栽培したブルーベリーや抽出した葉のエキス等を用いて、スキンケア商品やブルーベリージュース、ジャム、キャンディなどの新商品開発を進めてきました。

平成 28 年度に取り組んだビジネスプランの実証活動では、ブルーベリーやイチゴ、加工品の海外や首都圏への展開をめざして、台湾やシンガポールでの展示会・商談会等へ積極的に参加しました。

現在、台湾への輸出に向けた取組を進めているほか、百貨店からのニーズに応じて、食品製造事業者と連携して新商品の開発をスタートさせるなど、取組を次々と発展させています。

「紀伊ファーム」代表　石倉　至さん【紀北町】

紀伊ファームで栽培しているサツマイモを加工して、干し芋の詰め合わせ商品の開発に取り組みました。

⇒石倉さんの紹介　23ページ

イガグリインタラクト【伊賀市】

農業者と様々なクリエイターが繋がるプラットフォームづくりをめざして、地域に根付く新たなビジネスモデルを生み出すための学びと実践のワークショップを開催しました。

農村暮らし 市町別ガイド

桑名市 32 ページ

いなべ市 32 ページ

四日市市 32 ページ

亀山市 32 ページ

津市 33 ページ

松阪市 33 ページ

大台町 33 ページ

多気町 34 ページ

明和町 34 ページ

伊勢市 35 ページ

志摩市 35 ページ

玉城町 35 ページ

大紀町 36 ページ

度会町 36 ページ

南伊勢町 36 ページ

伊賀市 37 ページ

名張市 37 ページ

尾鷲市 38 ページ

紀北町 38 ページ

熊野市 39 ページ

御浜町 39 ページ

紀宝町 40 ページ

桑名市　「本物力こそ、桑名力。」

【INFORMATION】 人口 (140,303 人) 面積 (137 ㎢) 人口密度 (1,027 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (2.0%) 老年人口割合 (25.0%) 主な地場産業（観光業、工業、農業）

「桑名で住みたい」と選ばれるまちづくりの取組を開始

木曽三川の河口にある桑名市は、交通の要衝として栄えた歴史や文化が数多く残るまちであるとともに、北西部は養老山地、南東部は伊勢湾に面し、山と川と海に囲まれた水と緑に恵まれた地域です。
農業地帯は、丘陵地帯・伊勢湾に面した木曽三川と員弁川がつくる沖積平野、および木曽川と長良川によってつくられた輪中に代表される低くて平坦な水郷地帯に区分されます。
立地条件を生かし、平坦部では水稲・麦を中心に、花卉園芸やトマト・なばな等の野菜、丘陵地では、みかんやタケノコ等が生産されており、特に「トマト」と「なばな」は、ブランドとして定着しています。
新規就農希望者へは、ＪＡや県等関係機関と連携しながら、就農相談を行っています。

桑名市農林水産課　0594-24-1203

産地ブランドの「トマト」

いなべ市　住んでいーな！来ていーな！地方創生のまち

【INFORMATION】 人口 (45,815 人) 面積 (220 ㎢) 人口密度 (208 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (2.3%) 老年人口割合 (25.6%) 主な地場産業（農林業）

緑の山々、広がる田園　四季を感じる癒しのまち『いなべ』でゆったり田舎生活を

三重県の北の玄関口に位置するいなべ市は、北に養老山地、西に鈴鹿山脈が走り、中央を流れる員弁川を挟んで田園地帯が広がる緑豊かなまちです。
なにより魅力的なのは元気な市民。まちの資源を見直し、新しい価値を生み出そうとする人が増えてきました。
農業では、山々が生み出す清流を生かし、良質米やお茶、黒毛和牛の産地として知られています。
また、冷涼な気候を生かして、そばの栽培が進められ、秋そばの収穫時期である 11 月には、毎年盛大に新そば祭りが開催され、多くの来場者で賑わいます。

【移住】いなべ市 都市整備部 都市整備課　0594-74-5814
【就農】いなべ市 農林商工部 農林振興課　0594-46-6306

竜ヶ岳からのいなべの田園風景

四日市市　みんなが誇りを持てるまち四日市

【INFORMATION】 人口 (311,874 人) 面積 (206 ㎢) 人口密度 (1,507 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (1.6%) 老年人口割合 (25.3%) 主な地場産業 (農業、茶業、工業)

工業都市のイメージが強いですが、四日市は「農業」も活発です！

本市は三重県北部に位置し、西に鈴鹿山脈、東は伊勢湾に面した自然豊かな地域です。市域の６割弱を農業振興地域が占め、都市近郊の特性を生かして多様な農業が営まれています。米を中心に、転作作物としての小麦･大豆や、恵まれた立地条件を生かした伝統ある茶、ハクサイ・バレイショ・キャベツ・ダイコン・カブを中心にした露地野菜、施設を利用した花き・メロン・トマト・イチゴ、ネギ等の軟弱野菜が生産されています。
新規就農者を対象に、施設等設備に係る初期投資費用の一部補助を実施し、経営立ち上げ時期の費用負担の軽減を図っています。また、市農業センターでは、就農に向けた農作物栽培技術の習得、訓練の場を提供し、新規就農を支援しています。

四日市市 商工農水部 農水振興課 農水政策係 059－354－8180

水沢地区の茶畑

亀山市　亀山でスタートさせる初めての農業

【INFORMATION】 人口 (50,254 人) 面積 (191 ㎢) 人口密度 (263 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (3.1%) 老年人口割合 (25.1%) 主な地場産業（農業、茶業、製造業）

東と西の道が交わる小さくても便利なまち、亀山

三重県の北部に位置する亀山市は、温暖な気候と肥沃な土地を生かし、米、お茶、畜産、花木など幅広く農業が行われています。
古くから交通の要衝として栄えた亀山市は、現在も高速道路や鉄道が交わり、その利便性は健在です。緑あふれる丘陵地には茶畑が広がり、かつての宿場町が江戸時代の面影を残す一方、すぐそばには住宅地や暮らしに便利な施設がコンパクトに整っています。
住みよく、農業に適したまち亀山で農業を始めてみませんか？
亀山市では新規就農や移住の相談を行っていますので、ぜひ一度ご相談ください。

【移住】亀山市 企画総務部 企画政策室 0595-84-5770
【就農】亀山市 環境産業部 農政室　0595-84-5082

亀山の茶畑

津市

「つ乃めぐみ」うましくに“三重”で
センターを張っています！

【INFORMATION】 人口 (279,886 人) 面積 (711 ㎢) 人口密度 (394 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (2.8%) 老年人口割合 (27.9%) 主な地場産業（農業・畜産業、林業、水産業）

津市で農業を始めたい方を全面的にバックアップ！

三重県の中央部に位置する津市は、県都として行政機関を中心に多様な都市機能が集積しています。また、白砂青松の面影を伝える長い海岸や美人の湯として知られる榊原温泉、映画の舞台にもなった美杉地域の癒しの森など多種多様な自然を楽しむことができます。

高速道路や鉄道、中部国際空港への海上アクセスなど交通アクセスにも恵まれ、大学や短期大学といった高等教育機関、大学病院などの医療機関、博物館や美術館といった文化施設など、様々な都市機能が集積する便利で住みやすいまちです。市民アンケート調査でも、回答者の 87%が津市に住み続けたいと回答しています。

市内では、温暖多雨な気候と豊かな大地を活かし、様々な農産物が栽培されています。津市では、食の安全と市民の暮らしを支えるため、意欲ある担い手の確保・育成や、生産者が農業経営をしやすい環境づくりに取り組んでいます。
また、市内で生産される農林水産物の消費及び生産拡大を図るため、ブランド化と地域内外への情報発信にも取り組んでいます。
現在、津市の農林水産物の魅力をＰＲするキャラクター「つ乃めぐみ」がインパクトたっぷりに歌い踊るプロモーションビデオ放映をはじめ、様々な場所でプロモーション活動を積極的に展開しておりますのでご注目ください。

新規就農支援としては、相談窓口を設け、ＪＡなど関係機関とも連携しながら、就農を希望される方への情報提供や研修先の紹介などを行っています。ＵＩＪターン就職者には、津市独自の「ふるさと就職新生活応援奨励金」の制度もありますので、ぜひ一度ご相談ください。

【移住】 津市 政策財務部 政策課 059-229-3101
津市 美杉総合支所 地域振興課 059-272-8080
【就農】 津市 農林水産部 農林水産政策課 059-229-3172

関係機関と連携した就農相談の実施

農業の基礎的知識の習得支援（市民農業塾）

松阪市

移住相談・新規就農相談・随時受付中！

【INFORMATION】 人口 (163,863 人) 面積 (624 ㎢) 人口密度 (263 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (4.1%) 老年人口割合 (28.1%) 主な地場産業（農業、畜産業、漁業、林業、茶業）

松阪牛のふるさとのまちで就農しませんか？

松阪市は、三重県のほぼ中央に位置し、西部が山間地、中央部は丘陵地で東部一帯には伊勢平野が広がっています。名所旧跡が多数あり、かつ農業も盛んで、全国に名高い松阪牛発祥の地として知られています。水田農業が効率的に営まれ、小麦・大豆は県内第１位の生産面積を誇ります。
市内西部の飯南・飯高地域は県内有数の茶産地で、上質な深蒸煎茶が生産されています。当地域の深野地区では石積みの棚田が保全管理され、棚田百選に選定されています。また、当地域には「空き家バンク制度」もあり、移住した際の家屋改修やリノベーションの補助も充実しています。就農希望の方には農地の斡旋や国の農業次世代人材投資資金を活用した支援も行っています。

【移住】松阪市 飯南地域振興局 地域振興課 0598-32-2511
【就農】松阪市 産業経済部 農水振興課 0598-53-4116

山間地に広がる田園風景

大台町

町全体がユネスコエコパークの大台町で
自然にやさしい農業を

【INFORMATION】 人口 (9,557 人) 面積 (363 ㎢) 人口密度 (26 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (8.2%) 老年人口割合 (39.8%) 主な地場産業（林業、茶業）

世界が認めた自然の中で農業をしよう

大台町は三重県の中南西部に位置し、清流宮川と紀伊の山々に抱かれた自然あふれる町です。平成28年3月には、大台町と奈良県の１市５村に及ぶエリアが「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」に拡張登録され、大台町全域がユネスコエコパークとなりました。
　この豊かな恵みを生かし、主に兼業農家により、稲作・畑作が営まれているほか、数少ない専業農家は、香り豊かな「大台茶」の生産や全国に誇るブランド和牛「松阪牛」の肥育にも取り組んでいます。
　町では、新規就農に特化した支援制度はありませんが、道の駅に野菜を出荷することを条件にハウス整備や農業機械購入の支援を行っています。加えて農林漁業体験民宿等設備に対する支援や移住・定住のための空き家改修支援も行っています。

【移住】大台町 企画課 0598-82-3782
【就農】大台町 産業課 0598-82-3786

大台町の大杉谷地区にある現在入居者募集中の空き家

多気町　「高校生レストラン」のまち多気町

【INFORMATION】 人口 (14,878 人) 面積 (103 ㎢) 人口密度 (144 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (11.4%) 老年人口割合 (31.6%) 主な地場産業（農業）

多気町独自で農業次世代人材投資資金（150 万円）にプラスして更に 90 万円を上乗せ！

三重県のほぼ中央に位置する多気町は、伊勢本街道・和歌山別街道・熊野街道と三本の旧街道が通る古くから人々の往来が活発な土地です。平成 14 年にオープンした高校生レストラン「まごの店」は、相可高校・五桂池ふるさと村・多気町の産学官が協働して実現したもので、生徒のきびきびした姿や美味しい料理が話題を呼び全国から多くの観光客が訪れています。

雪がほとんど積もらない過ごしやすい気候で、里山と里川、田畑に囲まれた自然豊かな環境です。また、中心には商業地があり、生活の利便性もよい町です。交通アクセスも良好で、車では、高速道路を利用して、名古屋まで 90 分、伊勢神宮まで 30 分、公共交通機関では JR 多気駅を利用でき、津市・松阪市・伊勢市など、三重県中南勢地域が広く通勤圏内に入ります。

農業では、江戸時代から栽培されている特産の伊勢芋や、前川次郎柿を筆頭に、伊勢茶・米・苺・トマト・椎茸などの多様な野菜が生産されているほか、松阪牛の肥育も盛んです。

現在、「食のまち多気」で新たに農業にチャレンジしていただける方を募集しています。多気特産物の収穫体験や新規就農者との交流をしていただける農業体験を実施しているほか、就農開始時の不安を払拭するため、多気町へ移住する 45 歳以下の方などを対象に、国からの交付（農業次世代人材投資資金：最大 150 万円）に加え、多気町独自で 90 万円を 2 年間補助するサポートを行っています。また、農地や空き家の取得に向け、農地の斡旋や空き家バンクの制度の紹介などにより、きめ細かく相談に応じます。

【移住】多気町 企画調整課　0598-38-1124
【就農】多気町 農林商工課　0598-38-1117

多気町の特産物「伊勢芋」の継承を目指した実地研修

特産の「前川次郎柿」

明和町　明和町で「快適な農村暮らし」をしてみませんか？

【INFORMATION】 人口 (22,586 人) 面積 (41 ㎢) 人口密度 (550 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (6.0%) 老年人口割合 (29.1%) 主な地場産業（農業、漁業）

「農村暮らし」と「快適な生活」が両立できます！

明和町は三重県のほぼ中央、松阪市と伊勢市の間に位置しており、気候は温暖で冬でも降雪はほとんどみられず、町のおよそ 9 割を占める平野部が伊勢湾にむけて広がっています。農業は、その広大な平地を活かした稲作を中心としながら、施設野菜、畜産業など多様な農業が営まれています。
伊勢湾に面している当町では漁業も盛んに行われており、ひじきや海苔、貝類といった水産物が水揚げされています。
農業振興施策としては、水田における麦、野菜等の生産や、6 次産業化（農水産物の生産、加工、販売を 1 事業者で行うこと）の支援を目的とした、当町独自の補助金制度があり、多くの農家にご活用いただいています。
また、新たに農業を始めようとされる方には、県やＪＡなどの関係機関と連携したサポート体制を整備し、丁寧な就農相談等、きめ細やかなサポートに努めています。
当町は主要道として北部に国道 23 号線、南部に県道 37 号線が横断しており、県庁所在地の津市へは車で 40 分、隣接市の伊勢市と松阪市の中心部へは 20 分でアクセスできます。町内には大型ショッピングセンターのほかスーパーマーケットやコンビニも多く、日常生活で不便さを感じることはありません。また、町内には近畿日本鉄道の駅が 2 駅あり、鉄道で、名古屋へは 100 分、大阪へは 120 分と、大都市へのアクセスも比較的良好です。
明和町は、農村暮らしのようなスローライフに憧れながらも、田舎の利便性の悪さから今ひとつ移住に踏み切れないような方にぴったりの町です。
「農村暮らし」と「快適な生活」を両立していただけますので、みなさまからのお問い合わせをお待ちしております！

【移住】明和町 防災企画課　0596-52-7112
【就農】明和町 農水商工課　0596-52-7118

明和町の広大な水田

伊勢湾にむけて広がる広大な平野

伊勢市　お伊勢さんで就農してみませんか？

【INFORMATION】 人口 (127,817 人) 面積 (208 ㎢) 人口密度 (613 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (2.7%) 老年人口割合 (29.4%) 主な地場産業（観光業、農業、水産業）

特産物の生産者を募集中！

伊勢市は三重県南部に位置し、古くから「お伊勢さん」と呼び親しまれてきた伊勢神宮を擁し、神宮御鎮座のまちとして栄えてきました。
市の中央には清流日本一に輝く宮川が流れ、比較的温暖な気候の中、農業が営まれています。平野部では稲作のほか、県内１位の生産量を誇る青ねぎやいちご等の野菜類、高品質な施設花きのバラなどが栽培されています。山間部では市の天然記念物の蓮台寺柿や三重のバイオトレジャーに認定された横輪いもが生産されています。
また、名古屋・大阪とのアクセスも良く、高速道路を利用すると名古屋から 90 分、大阪から 120 分となっています。歴史が息づく、自然豊かな環境で就農してみませんか？

【移住】伊勢市 情報戦略局 企画調整課　0596-21-5510
【就農】伊勢市 産業観光部 農林水産課　0596-22-0370

伊勢の特産物「青ねぎ」の栽培風景

志摩市　温暖な自然あふれるまちで おいしい食材に出会えます

【INFORMATION】 人口 (50,341 人) 面積 (179 ㎢) 人口密度 (281 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (9.0%) 老年人口割合 (37.4%) 主な地場産業（漁業、観光業）

特産品干し芋「きんこ」の生産に挑戦してみませんか？

志摩市は、四季を通じて温暖な気候で、陸域全域が伊勢志摩国立公園に指定され、美しく豊かな海と山の自然に恵まれた地域です。産業では、豊かな食材を生み出す農林水産業と美しい景観を活用した観光関連産業が特徴です。農業では、米、多様な野菜、イチゴ、メロンなどの栽培が特徴で、特に特産品で志摩ブランドに認定されている干し芋「きんこ」は、人気が高い商品です。市では「きんこ」の生産量増加を図るため、芋の栽培から加工までを実践できる「きんこ塾」を開校し、「きんこ」の生産拡大に力を入れています。また、「きんこ」以外でも農協が主体となった農業塾「なごみ」で露地野菜の基礎を学ぶことができます。

【移住】志摩市 政策推進部 総合政策課　0599-44-0205
【就農】志摩市 産業推進部 農林課　0599-44-0288

志摩の特産品「きんこ」

玉城町　「ずっと暮らしたくなるまち玉城」の仲間になりませんか？

【INFORMATION】 人口 (15,431 人) 面積 (41 ㎢) 人口密度 (377 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (7.2%) 老年人口割合 (25.9%) 主な地場産業 (農業、製造業）

まち・ひと・しごと…バランスがとても心地よいまちです

県南部の伊勢平野に位置する玉城町では、温暖な気候を活かし、お米をはじめ、いちご、柿、梨、ぶどう、かぼちゃ、キャベツなどたくさんの作物が栽培されています。平坦な土地柄から鳥獣被害は少なく、周囲に急な山や海はないため安心して暮らせるまちです。
世界遺産熊野古道伊勢路や伊勢神宮へつながる街道が交わり、目を少し外に向けると昔ながらの「田舎の夏休み」を想起させる田園風景が広がります。町中をオンデマンドバス「元気バス」が無料で走り、お出かけをサポートしながら最先端のＩＣＴにより健康を見守っています。
歴史文化・伝統にふれ子どもから大人までイキイキと暮らせる、そんな素晴らしい田舎暮しを満喫しつつ、やりがいを持って働くことができる、それが私たち自慢の玉城町です。

玉城町役場 総合戦略課　0596-58-8208

伊勢地域（伊勢市・度会郡）関連情報

あぐりん伊勢　これから農業に挑戦したい方、興味のある方歓迎！！

働きながら青ねぎ等の栽培技術を習得しませんか？

新規就農者の育成と産地維持、遊休農地の解消を目的に平成 24 年に JA 伊勢 100%出資子会社として (株) あぐりん伊勢は設立されました。新規就農を目指す研修社員は、2 年間の勤務で青ねぎ等の栽培技術などを習得し、就農をめざします。
現在は、５名の研修社員が就農を目指して働いています。就農時には JA 伊勢が責任をもって農地の斡旋、制度資金申請のお手伝いをさせていただきます。また、就農後も、部会員、営農指導員、普及センターが全面的にサポートいたします。

JA 伊勢 営農自己改革推進室 0596-62-2281

就農に向け、日々研修に励む研修生

大紀町　海・山・川を感じる暮らしを求めて

【INFORMATION】 人口 (8,939 人) 面積 (233 ㎢) 人口密度 (38 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (10.7%) 老年人口割合 (45.3%) 主な地場産業（漁業、林業、農業）

子育て世帯応援！エンジェル手当など手厚い施策

三重県の中央南部に位置する大紀町は、南部は雄大な太平洋を望み、中央には一級河川の宮川や大内山川、藤川が流れ、海・山が織りなす自然はとても豊かです。
平均気温は 16℃前後と県内でも比較的温暖な地域ですが、大台山系に囲まれた山間部の冬季は冷え込みが厳しく、また平均降水量が 2,900mmを越える全国屈指の多雨地帯です。

沿岸部の錦地区には漁港があり、真鯛やブリの漁業が盛んで、特にブリのシーズンは、ひと際活気で賑わいます。
一方、山間部の七保地区では、日本一の銘柄和牛「松阪牛」となる七保牛の肥育が盛んで、松阪共進会においても、高い評価を受ける肥育農家が 15 戸あります。
また、大内山地区では「良質な牛乳は健康な乳牛から」を合言葉に、大切に育てた乳牛から絞った生乳を原料に、成分無調整牛乳やヨーグルト・牛乳プリン等の乳製品が製造され、「大内山牛乳」としてブランド化されています。
そのほか、清流が育むお茶や稲作、椎茸などの特用林産物の栽培や、狩猟したシカやイノシシのジビエ活用も行っています。

本町は、ＪＲ紀勢本線や、国道 42 号線に加え、紀勢自動車道も整備され、名古屋および大阪から車で 90 分、三重県の県庁所在地津市から車で 60 分と、町内に２つのインターチェンジがありアクセスも良好です。

また、子育てを応援するため、エンゼル手当として、出生一時金や給食費の補助、通学費補助、放課後児童クラブなど県下でもトップクラスの子育て施策を行っています。
移住や新規就農者の受け入れ体制はまだまだ未熟ですが、出来る限りのサポートをさせていただきます。

【移住】大紀町 企画調整課　0598-86-2214
【就農】大紀町 農林課　0598-86-2246

七保牛

阿曽地区の風景

度会町　清流「宮川」が流れる自然豊かなまちで、田舎暮らしを始めませんか？

【INFORMATION】 人口 (8,309 人) 面積 (135 ㎢) 人口密度 (62 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (6.8%) 老年人口割合 (31.8%) 主な地場産業（農林業）

関係機関が一体となって、就農サポートを行います

三重県の南部に位置する度会町は、東に伊勢平野を望み、西の大台山系を源流とする清流「宮川」が町のなかを流れています。川沿いには茶畑が広がり、日本一の清流から立ち上る朝霧が、滋味濃厚で深い香りが自慢の伊勢茶を育んでいます。
本町は名古屋市から車で 100 分、三重県の県庁所在地の津市から車で 45 分の距離にあり、自然豊かで災害の少ない安全な町です。伊勢志摩地域の観光スポットにも近く、町内では SUP やラフティングなど川のレジャーをはじめ、登山やハイキングなどが気軽に楽しめます。
移住相談、新規就農相談の窓口が連携し、田舎暮らしのサポートをさせていただきます。

【移住】度会町 政策調整課　0596-62-2423
【就農】度会町 産業振興課　0596-62-2416

新茶シーズンの茶摘みの様子

南伊勢町　潮の香りがするみかんの町

【INFORMATION】 人口 (12,788 人) 面積 (242 ㎢) 人口密度 (53 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (20.8%) 老年人口割合 (49.1%) 主な地場産業（漁業、農業、林業）

みかん農家の担い手確保のための「みかんの学校」を開催

伊勢志摩地域の南側沿岸に位置する南伊勢町は、漁業と農業が基幹産業の町です。
農業では温暖な気候を生かし、海岸沿いの日当たりの良い斜面で、みかん、梅、中晩柑類等が栽培されています。鳥獣被害、後継者不足により柑橘生産者が減少傾向にあることから、担い手の確保のため、生産者、農協職員、及び県普及センター職員が講師となり、みかん栽培の知識・技術の習得を目的にした「みかんの学校」を開催しています。これまでにみかん農家の後継者や新規就農者の方々等に受講していただいております。ご興味がある方は、ぜひご参加ください。

【移住】南伊勢町 行政経営課　0599-66-1366
【就農】南伊勢町 水産農林課　0596-77-0007

みかんの学校の様子

伊賀市　ＡＥＲＡ特集「移住しやすい街 110」で最高ランク三ツ星を獲得！

【INFORMATION】 人口 (90,581 人) 面積 (558 ㎢) 人口密度 (162 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (6.0%) 老年人口割合 (31.7%) 主な地場産業（農業、製造業、観光業）

ライフスタイルの選択肢が豊富な移住しやすいまち

伊賀市は、京都・奈良や伊勢を結ぶ大和街道・伊賀街道・初瀬街道を有し、都に隣接する地域として、また交通の要衝として、江戸時代には城下町や伊勢神宮参拝者の宿場町として栄えてきました。このような背景から、京・大和文化の影響を強く受けながらも、独自の文化を醸成しています。
また、伊賀流忍者や松尾芭蕉のふるさととしても知られ、多くの観光客が訪れます。

古琵琶湖層の肥沃な土地、淀川源流の清水、盆地特有の気候により育まれた「伊賀米コシヒカリ」は、お米の食味ランキング（日本穀物検定協会）にて５年連続「特Ａ」の評価を受けています。
また、国営事業で造成された青蓮寺用水地区の畑地では、アスパラガス・かぼちゃ・きゅうり・キャベツ・そば・たまねぎなど、多くの種類の野菜が栽培されています。

市内には、総合病院が２つ、大型スーパーがあり、子育てでは、延長・一時保育、放課後児童クラブ、子育て支援センターによるサポートのほか、中学生までの医療費無料化、第３子以降の保育料無料化（※一部条件あり）などを実施しています。
あわせて、高速道路、鉄道、バスなどの交通網により都市部へのアクセスが容易であることも大きな魅力です。
豊かな自然のなかにありながら、程よく便利な生活ができ、「まちなか暮らし」や「田舎暮らし」など自身にあったライフスタイルの選択肢が豊富なことなどから、ＡＥＲＡ（朝日新聞出版）の特集「移住しやすい街 110」において最高ランク三ツ星を獲得しました。

移住相談に総合的に対応するため、総合相談窓口（移住コンシェルジュ）を開設しましたので、お気軽にご利用ください。

【移住】伊賀市 地域づくり推進課　0595-22-9680
【就農】伊賀市 農林振興課　0595-43-2301

伊賀市の田園風景

伊賀市移住ガイドブック [iga-style] を発行しています

名張市　自然豊かで住み良いまちで「農」ある暮らしを始めませんか？

【INFORMATION】 人口 (78,795 人) 面積 (130 ㎢) 人口密度 (607 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (2.5%) 老年人口割合 (28.2%) 主な地場産業（農業、製造業、観光業）

暮らしのまち名張 豊かな農業ライフを全面サポート！

三重県の西部、伊賀盆地の南西部に位置する名張市は、豊かな水と緑に恵まれ、周囲を山野や赤目四十八滝、香落渓といった渓谷を含めた美しい自然に囲まれており、四季折々の鳥の鳴き声などの自然の音を感じながら暮らすことができます。
また、本市は大阪から電車で 60 分、名古屋から 90 分と、都市部からのアクセスも良好で、自然豊かな環境で暮らしながら、多様な働き方を実現できます。

平均気温は約 15℃、盆地特有の寒暖差の大きな気候であり、肥沃な粘質土壌と清らかな水を活かし、良質な農産物生産に適しています。特に、本市で広く栽培される伊賀米コシヒカリは、日本穀物検定協会の食味ランキング最上位の「特 A」の評価を 5 年連続で獲得し、ブランド品として認知されています。
その他にも、三重ブランドに認定されている伊賀牛や、美旗メロン、ぶどうなど、魅力のある良質な農産物が生産されています。

本市には、先進農家 11 名（有機野菜、施設・露地野菜、水稲、果樹等）が就農サポートリーダーとして登録され、栽培に関する技術の習得だけでなく、農地銀行制度や空き家バンク制度等を活用し、農地・住居の確保などの相談にもきめ細かく応じています。また、交流会を開催するなど、新規就農者同士の情報交換・交流の場を設定し、地域の担い手として定着できるよう環境づくりに努めています。

移住相談に総合的に対応するため、総合相談窓口（移住コンシェルジュ）を開設しましたので、お気軽にご利用ください。

【移住】名張市 企画財政部 地域活力創生室　0595-63-7782
【就農】名張市 産業部 農林資源室　0595-63-7625

名張市の主な特産物

名張市の特産物　ぶどう狩りの様子

尾鷲市

悠久の自然の営みに育まれたまち
「おわせ」

【INFORMATION】 人口 (18,009 人) 面積 (193 ㎢) 人口密度 (93 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (6.4%) 老年人口割合 (41.1%) 主な地場産業（水産業、林業）

山の幸、海の幸に恵まれた「おわせ」へ移住してみませんか。

三重県南部に位置する尾鷲市は、世界遺産「熊野古道」が横断しており、山と海に囲まれた自然豊かなまちです。

総面積の約 90%を山林が占め、江戸時代から林業のまちとして発展してきました。その山林で産出された「尾鷲ヒノキ」は、強靭な良質材として知られ、「伊勢志摩サミット」で、首脳会議用テーブルなどに使用されたほか、この地域独自の伝統的な「尾鷲ヒノキ林業システム」が日本農業遺産に認定されるなど、近年、国内外で知名度が高まっています。

また、熊野灘のリアス式海岸に面し、黒潮の恩恵による天然の良港があり、九つの漁港を中心に漁業のまちとしても栄えてきました。

農業では、生産規模は大きくないものの、甘夏をはじめ良質な農作物が数多く栽培されています。

本市では、農業へのチャレンジを応援するため、本市の空き家バンク制度を利用される市外からの移住者を対象に、小規規模の農地（100 ㎡から）を取得・貸借できるよう、要件を緩和しています。
田舎へ移住し、スローライフをおくりながら農林水産業を始めたい方も、行政がしっかりとサポートさせていただきますので、お気軽にご相談ください。

天狗倉山から見下ろす尾鷲市街の風景

太陽の光と潮風を浴びて育つ甘夏の風景

【移住】尾鷲市 市長公室　　0597-22-2111
【就農】尾鷲市 木のまち推進課 0597-23-8224

紀北町

魅力・ときめきいっぱい、
海・山・川と人のバランスのいい町

【INFORMATION】 人口 (16,338 人) 面積 (257 ㎢) 人口密度 (64 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (10.2%) 老年人口割合 (42.3%) 主な地場産業（水産業、林業、加工業）

若手農林水産業者の新たなチャレンジを行政がしっかりサポート！

三重県南部の紀北町は、黒潮踊る熊野灘と日本有数の原生林が残る大台山系を擁する自然の宝庫です。農林水産業では、ソウルフードのくき漬けやブランド米の生産をはじめ、高度な技術を誇る「尾鷲ヒノキ」の育林、鰹・鯖等の一本釣漁業やまき網等の漁業も全国的に高い評価を得ています。

若者の都市部への流出や高齢化が進む現状はあるものの、近年、地域内外から新たに農林水産業に参入する若者も増えてきています。県内でも珍しく、農業・林業・漁業の枠を超えて、20 代～ 40 代の若手生産者が共同で実行委員会を設立し、「地域内に新しい元気な風を吹かす」という熱い思いを胸に秘め、様々な「こだわり」を持った生産者の見本市である「海・山こだわり市」の定期開催に取り組んでいます。

若手生産者による元気な取組は、紀北町の農林水産業を牽引し、トマトジュースや卵、椎茸など多くの紀北町産の農林水産物が伊勢志摩サミットの食材として採用され、世界中にその魅力が発信されるきっかけとなりました。
これらのほか、紀北町産ＦＳＣ認証材の「尾鷲ヒノキ」が、首脳会議用の円卓に使用されました。

このように、多彩な魅力のある農林水産業へのチャレンジを、行政がしっかりサポートさせていただきますので、こだわりの農林水産物と、素敵な人に会いに、是非、紀北町にお越しください。

若手生産者（海・山こだわり市メンバー）

町内農業体験を経て就職したＩターン者

【移住】紀北町 企画課　　0597-46-3113
【就農】紀北町 農林水産課　0597-46-3116

熊野市

豊かな自然と歴史の中で人が輝く、
活力と潤いのあるまち・熊野

【INFORMATION】 人口 (17,322 人) 面積 (373 ㎢) 人口密度 (46 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (8.0%) 老年人口割合 (41.8%) 主な地場産業（農業、林業、漁業）

新規就農や移住に手厚い支援・サポートが魅力です

県南部に位置する熊野市は、熊野古道をはじめ、鬼ケ城、獅子岩、花の窟などを有する世界遺産の町です。紀伊山地の急峻な山地やリアス式海岸、七里御浜からなる熊野灘など、変化に富んだ地形を有しています。また、棚田百選に選定された「丸山千枚田」があり、農村の美しい原風景が継承されています。

年間平均気温は 17℃と温暖な気候で、海岸部の日当たりの良い場所では、「温州みかん」などの柑橘が栽培されています。また山間部では水稲のほか、郷土料理「めはり寿司」の材料として欠かせない「たかな」が栽培され、「たかな漬」に加工されています。農業のほか、海岸部では漁業が、山間部では林業が盛んです。

熊野市では、新規就農をめざすＩＪターンの方を対象に、施設園芸用設備の整備に要する費用の一部補助や、ＩＪターン専用住宅の貸し出し、家賃補助（最長２年）などの各種支援策を用意しています。
そのほか、柑橘での新規就農を検討されている方を対象に、熊野市も含めた１市２町、県、ＪＡ等が連携して、農業体験や先進農家での研修等を実施し、全面的に就農をサポートしています。また、トマトなどの施設野菜については、ハウスでの研修制度（最長２年）もあり、技術習得や農地の取得、施設の整備まで、切れ目なくサポートしています。

熊野市は平成 25 年に熊野尾鷲道路の開通後、名古屋および大阪から車で 180 分、三重県の県庁所在地津市から車で 90 分と、都市部からのアクセスも改善しています。移住相談・新規就農相談それぞれの窓口が連携し、きめ細かく、農村暮らしの実現に向けサポートさせていただきます。

棚田百選にも選定された「丸山千枚田」

みえの伝統野菜「たかな」の栽培風景

【移住】熊野市 市長公室　　0597-89-4111（内線 313）
【就農】熊野市 農業振興課　0597-89-4111（内線 483）

御浜町

「年中みかんのとれるまち」で
おいしいみかんを作ってみませんか？

【INFORMATION】 人口 (8,741 人) 面積 (88 ㎢) 人口密度 (99 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (23.2%) 老年人口割合 (37.5%) 主な地場産業（農業）

多くのIターン就農の先輩からアドバイスをいただけます

三重県南部に位置する御浜町は、紀伊半島を背に太平洋を望み、20 数キロにわたって続く美しい七里御浜海岸の中間部に位置しています。世界遺産に登録された熊野古道の浜街道・横垣峠・風伝峠や、棚田の里に壮大な朝霧が流れおちる「風伝の朝霧（さぎり）」など、自然と歴史が織りなす美しい風景に彩られています。

平均気温 17℃と温暖な気候や緩傾斜という立地条件を生かし、海岸部を中心に柑橘が栽培されています。柑橘の種類では、９月から10月にかけて収穫する極早生温州が多く、11月の早生温州、１月から５月にかけての中晩柑類、７～８月のハウスみかんと年間を通してみかんを収穫できます。また、沿岸部では漁業、山間部では梅、水稲、畜産も盛んであり、その一部は御浜町のふるさと納税特産品となっています。

農業が盛んな当町では、新規就農者を随時募集しています。特に、基幹作物である柑橘については、農業体験や先進農家での研修等を実施し、全面的に就農をサポートしています。
また、柑橘のほか、畜産や花卉も含め、先進農家７名が就農サポートリーダーとして登録され、栽培技術の習得だけでなく、農地・住居の確保などの相談にきめ細かく応じています。

本町は車で名古屋から 180 分、大阪から 210 分、三重県の県庁所在地津市から 120 分と、高速道路の延伸で都市部からのアクセスは良好になりました。農業体験を通じて本町の自然豊かな環境を実感していただけると思います。新規就農の相談にきめ細かく対応し、独立自営就農の実現に向けサポートさせて頂きます。

温州みかんの園地

収穫直前の極早生温州みかん

御浜町 農林水産課　05979-3-0517

紀宝町　海・山・川の恵に抱かれ、ともに輝き創造するまち　紀宝

【INFORMATION】 人口 (11,207 人) 面積 (80 ㎢) 人口密度 (141 人 / ㎢)
第一次産業就業者比率 (7.4%) 老年人口割合 (33.9%) 主な地場産業（農業、工業）

若者定住、新規就農に手厚い支援があります！

三重県の最南端に位置する紀宝町は、東は七里御浜で熊野灘に面し、熊野川を隔てて和歌山県新宮市と接しています。町の一部が「吉野熊野国立公園」に含まれ、また、世界遺産の一部としても熊野川、七里御浜、御船島を擁しており悠久の歴史が育んだ自然が魅力の町です。

平均気温は 17℃と温暖な気候で、町内の海岸部では多品種の柑橘が栽培されています。特に振興作物であるマイヤーレモンは当町を含めた紀南地方が日本一の生産量を誇ります。山間部では水稲が盛んで、主要銘柄のコシヒカリを中心に栽培され、一部の地域では農薬の使用を半減したレンゲ米の栽培や集落全体で地域の風土を活かした米の栽培に取り組み、ブランド化も進めています。
また、海岸部では定置網を中心に、漁業も盛んです。

紀宝町では新規就農の支援策として一定条件はありますが、専業で農林水産業に就業する方を３年間支援する「農林漁業就業支援金」や I・J ターン者専用住宅を用意しています。また、紀宝町で柑橘での新規就農を検討されている場合は、県・他市町・ＪＡ等で構成する協議会での研修体制を整備しており、随時新規就農者を募集しています。他にも移住対策として空き家バンクもございます。

本町は車で名古屋、大阪から 180 分、三重県の県庁所在地津市から 120 分と高速道路の延伸で都市部からのアクセスも改善されてきております。新規就農相談の際には関係各所連携し、きめ細かく就農に向けサポートさせていただきます。

当町の特産品であるマイヤーレモン

道の駅「ウミガメ公園」のウミガメ

【移住】紀宝町 企画調整課　0735-33-0334
【就農】紀宝町 産業建設課　0735-33-0336

中山間地農業を元気にする取組を応援しています！

中山間地域に
お住まいの皆さんへ

中山間地農業ルネッサンス事業

国において、平成 29 年度から「中山間地農業ルネッサンス事業」がスタートしました。
この事業は、地域の特色を生かした多様な農業の展開を通じて、高齢化・担い手不足など厳しい状況に置かれている中山間地の農業を元気にしていくことを目的としています。
三重県でも、県内を８地域に区分して「地域別農業振興計画」を作成し、この事業を活用しながら、中山間地農業の活性化に取り組んでいます。

地域内外からの若者の受け入れ

特に、中山間地においては担い手不足が深刻であり、若い世代の新規就農を促進することは、重要な課題の一つです。近年では、都市部の若者を中心に、田園回帰の動きなどがあり、当冊子でご紹介しているように、多くのU・I ターンの若者が本県の農村をフィールドに活躍しています。
中山間地農業を元気にしていくため、他の地域の取組事例も参考に、若者の受け入れに向けて取組をスタートしませんか？

【ＪＡ・市町・県が連携して地域内外から新規就農の受け入れを進めている事例】
・三重南紀元気なみかんの里創生プロジェクト（熊野市・御浜町・紀宝町）：P41
・伊賀地域　就農相談窓口（伊賀市・名張市）：P41

担当窓口

【農業の活性化】三重県 農林水産部 担い手支援課　059-224-2016
【農村の活性化】三重県 農林水産部 農山漁村づくり課　059-224-2551

三重南紀元気なみかんの里創生プロジェクト ～みかんの新規就農者募集～

三重県最南端に位置する紀南地域（熊野市・御浜町・紀宝町）は、熊野灘に面し、冬でもめったに雪が降ることのない温暖な気候から、高品質なみかんの産地として知られています。高齢化などで農家が減少する中、後継者を確保するため、平成 20 年に、ＪＡ、市町、県が広域的に連携して「三重南紀みかんの里創生プロジェクト協議会」を立ち上げ、県内外から広くみかんの新規就農者を受け入れる取組を展開しています。
果樹は植えてから収穫までに時間がかかるので、新規就農が難しいというイメージがありますが、当プロジェクトでは、現在栽培している園地を借り受けるので、１年目から農産物を収穫し、収入を得られることが魅力です。
平成 20 年以降、60 名が農業体験を実施、そのうち 12 名が新規就農を実現し、みかんの担い手農家として活躍しています。

【就農に向けたプロセス】

①三重県紀州地域農業改良普及センターに相談 **0597-89-6126**
→ ②１泊２日の**農業体験に参加**（無料）※現地までの旅費は実費負担
→ ③１年間の研修 ※研修期間中は**青年就農給付金**（準備型）を受給できます
→ ④研修期間中に**園地・住居を探す** ※市町等が全面的にサポートします
→ ⑤**就農準備** ※軽トラック・動力噴霧器等の取得
→ ⑥就農 ※就農後も、**市町・ＪＡ・県で連携**して新規就農をサポートします

【オレンジアグリで働きながら研修】

ＪＡ三重南紀が出資し平成 27 年に設立された「株式会社オレンジアグリ」では、新規就農者の確保・育成をめざして、研修生の受入を行っています。モデル園での２年間の研修を経て、順次園地を「のれん分け」していくことで、産地の担い手確保と耕作放棄地の拡大防止をめざしています。

【先輩の取組事例】

P26 ～ P29

▶相談窓口　**三重県 紀州地域農業改良普及センター 0597-89-6126**

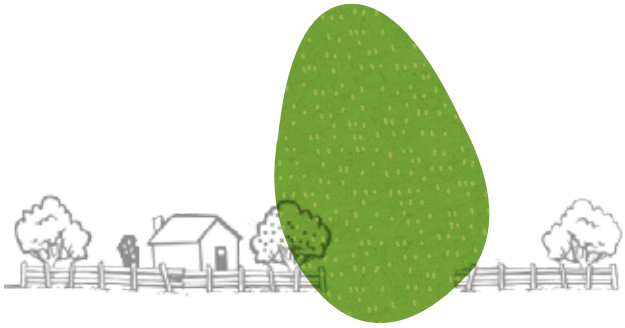
伊賀地域では、官民協働で移住・就農・定住環境づくりを進めています！

伊賀地域は、四方を山に囲まれた伊賀盆地に位置し、滋賀県、奈良県、京都府に接しています。盆地特有の寒暖差の大きい気候や淀川源流域のきれいな水を生かし、古くからおいしいお米が生産されており、当地域のコシヒカリは「伊賀米」として高く評価されています。
また、青蓮寺湖から水をひいている約 500ha の開畑地では、野菜生産やぶどうなどの果樹生産が盛んで、県外から移住された若者など、多数の新規就農者が活躍しています。
当地域では、新規就農者の受入拡大に向け、市、ＪＡ、農業高校、民間団体と県が連携して、移住・就農・定住ができる環境づくりに取り組んでいます。相談窓口のフロー図や支援策一覧など、各種支援ツールをご用意していますので、伊賀地域での就農にご興味のある方は、是非、伊賀地域就農相談窓口までご相談ください！

【先輩の取組事例】

P17 ～ P22

▶伊賀地域 就農相談窓口　**三重県 伊賀地域農業改良普及センター 0595-24-8115**



農業へのチャレンジを応援します！

三重県で新しく農業をはじめられた青年の数は、平成 20（2008）年までは年間 50 人から 70 人程度で推移してきましたが、農業や農村の持つ魅力への関心が高まっていることや、県外から移住をして、農業を営む法人に就職される方が増えたことなどから、毎年 130 人を超える高い水準で推移しています。

平成 28（2016）年のデータでは、新たに農業をはじめられた 138 人の方のうち、約８割の方が農業を営む会社に就職されています。また、農家の出身ではない方が全体の約８割を占め、農家の子弟が農業を継ぐという形よりも、農外から新規参入されるケースが多くなっています。

ご自分のライフスタイルにあわせて、自分らしい農業にチャレンジしてみませんか？

農業は十人十色・多様なスタイルがあります

①自営就農

自分自身の判断で栽培する品目や販路を決め、計画に沿って農地の取得や施設整備を行い自立して経営するスタイルです。独立心旺盛で自分らしい農業を追求したい方にオススメです。

▶情報収集
就農フェアや説明会等に参加

▶就農体験
短期～長期で農業を体験

▶技術習得
・農業大学校
・農業次世代人材投資資金（準備型）

▶就農準備
・就農計画作成
・資金確保
・農地取得

【主な支援内容】
※農業次世代人材投資資金（経営開始型）の交付（最長 5 年）
※有利な融資制度の活用・施設・機械等を整備する際の融資残補助・みえの就農サポートリーダー制度 (里親制度)

【相談窓口】**(公財) 三重県農林水産支援センター担い手育成支援課 0598-48-1226**

②農業を営む法人に就職

近年、水田農業・園芸・畜産など幅広い品目で、株式会社などを設立して企業的経営を行う農業法人が増えてきています。このような法人では経営規模の拡大や経営の多角化に伴い、農作業管理や販売・事務など幅広い職種で求人募集しています。
法人に就職して、経験を積んでから独立するケースも増えてきています 。農業に関心のある方はまず、求人情報をチェックしてみましょう。

【農業を営む法人の求人情報】
公益財団法人三重県農林水産支援センターでは、職業安定法第 33 条の許可を受け、三重県内で農林漁業にかかる職場で働きたい求職者に対し無料職業紹介事業を実施しており、ホームページに求人情報を掲載しています。また、他の職種と同様、ハローワークでも求人情報を検索していただけます。

【相談窓口】**(公財) 三重県農林水産支援センター 担い手育成支援課 0598-48-1226**

③地域資源活用型ビジネスを起業 (農家民宿・カフェなど)

農業を営みながら、自ら生産した農産物や地域の食資源などを用いて、農家民宿や カフェなどの交流拠点を営み、地域の活性化に貢献している事例も増えてきています。先輩の取組事例を参考に、ビジネス起業についても検討してみませんか？

【取組事例】
・UI ターンの方が営む農家民宿が県内にたくさんあります **▶P44・45 をご覧ください**
・カフェの起業事例：上木食堂 (いなべ市) **▶P8 をご覧ください**
・かぶせ茶カフェ（四日市市）**▶P10 をご覧ください**

【相談窓口】**三重県 農山漁村づくり課 059-224-2518**

新規就農者のための主な支援制度はこちら

①就農体験の実施

農業の具体的なイメージをつかむために、先進農家で農業を体験してみませんか？
１泊２日の短期から１年間以上に及ぶ長期まで、多様な機会が設けられています。

【農林水産支援センターの研修事業】
実践的な仕事を体験していただくため、先進農家での短期研修（２～７日間）及び長期研修（２～10ヶ月）を実施しています。
研修生を受け入れている事業体の情報を提供していますので、研修を希望される方は、農林水産支援センターまでご相談ください。

▶相談窓口　**(公財)三重県農林水産支援センター 担い手育成支援課　0598-48-1226**

【市町やＪＡなど地域の取組】
みかんの先進農家で１年研修　**▶熊野市・御浜町・紀宝町：P39～40をご覧ください**
青ねぎの研修（２年）　**▶あぐりん伊勢：P35をご覧ください**
１泊２日で農業を体験　**▶多気町：P34をご覧ください**
トマトなどの施設園芸を研修（最長２年）　**▶熊野市：P39をご覧ください**

②三重県農業大学校

農業・農村リーダーとなりうる高度な専門知識・生産技術と実践力を備えた農業経営者を養成するため、三重県が設置している農業者研修教育機関です。
高等学校卒業生（予定者を含む）以上を対象とする養成科二年課程に加え、就農意欲の高い方を対象とする一年課程を併設しています。
また、６次産業化や有機農法など、新規就農者等を対象に各種専門研修も実施しています。

▶相談窓口　**三重県 農業大学校 0598-42-1260**

③みえの就農サポートリーダー制度

栽培技術や農地・住居の取得、地域への溶け込みなど、新規就農者を地域で中心となってサポートしていただく先進農家等を、県が就農サポートリーダーとして登録する制度です。就農サポートリーダーにおいて研修を受けられた際は、農業次世代人材投資資金（準備型）の交付（年間150万円、最長２年）を受けることができます。

▶相談窓口　**三重県 担い手支援課 059-224-2354**

④認定新規就農者制度

新たに農業を始めようとする人が作成する青年等就農計画を市町が認定し、本計画の認定を受けた新規就農者に対して、重点的な支援を行う制度です。
【対象者】**新たに農業経営を営もうとする青年等で、次の条件に該当する方**
①青年（原則18歳以上45歳未満）
②効率的かつ安定的な農業経営を営む者となるために活用できる知識・技能を有する45歳以上65歳未満の者
③上記の者であって、法人が営む農業に従事すると認められる者が役員の過半数を占める法人

▶相談窓口　**三重県 担い手支援課 059-224-2354**

⑤農業次世代人材投資資金

青年の就農意欲の喚起と就農後の定着を図るため、就農前の研修期間（年間最大150万円・最長２年間）及び経営が不安定な就農直後（最長５年間）の所得を確保する資金を交付します。
【主な交付要件】**新たに農業経営を営もうとする青年等で、次の条件に該当する方**
①就農予定時の年齢が原則45歳未満で、次代を担う農業者となることに強い意欲を有すること。
②研修終了後１年以内に独立・自営就農または雇用就農または親元での就農が確実であること。

▶相談窓口　**三重県 担い手支援課 059-224-2354**

農林漁業体験民宿で農村暮らしを体験してみませんか！

農林漁業体験民宿は、農林漁業者の方が住宅を活用して開業する小規模の民宿です。農村暮らしの良さや農業を体験できることが魅力で、都市部の方に人気があります。
三重県には、県外から移住された方が営む民宿があり、農村暮らしの体験や移住の苦労話などを聞くことができます。農村への移住を考えたら、まずは、農林漁業体験民宿で農村暮らしを体験してみましょう！

津市｜農家民宿なかや

愛知県と広島県出身の岩田さんご夫婦が営む「農家民宿なかや」は、築 90 余年の古民家を活用した体験型民宿だ。
岩田さんは、もともと転勤の多い職業に就いていたが、子供の就学に合わせ、築 90 余年の古民家に巡り合えたことをきっかけに津市美杉町への移住を決意した。
岩田さんは米作りを中心に農業を行いながら、民宿の宿泊者に米作りや木工、川遊びなど自然を生かした体験を通して、田舎暮らしの素晴らしさを伝えている。
都会で行き詰ったら、リセットするきっかけをつくり、自分を楽にする憩いの場として利用してもらえればと岩田さんはいう。
美杉に移住した人達のネットワークもあり、田舎で暮らすことや移住についての相談にものってもらえる。

〒515-3312 津市美杉町上多気 1312
☎059-275-0205
素泊まり 4500 円
夕食かまど体験自炊プラン 5000 円
（BBQ も OK。1 組 3 名まで）
旬のお食事処美杉プラン 2300 円～（1 名）
体験朝食 500 円（1 名）
（基本は和朝食、お米パンの対応も可）
P　あり
http://www.zb.ztv.ne.jp/htf-iwata243120/

● アクセス 一志嬉野ICより約50分

大台町｜山里民泊みくり

名古屋市からUターンされた中江さんご夫婦が営む「山里民泊みくり」は、大台町（旧宮川村）の清流・宮川の支流、栗谷川沿いにある。平成 18 年、自宅の一部をリフォームし、三重県で初めて農林漁業体験民宿を開業した。
現在、WWOOF ジャパンホストにも登録されている。
食事のメニューは、鮎の塩焼き、鹿肉の燻製、山菜の天ぷらなどに、締めはご主人の手打ちそば。庭に建てた東屋で特製のテーブルを囲んでの夕食、話上手な中江さんが会話を盛り上げる。食事の後は満点の星空を眺めながらの五右衛門風呂。初夏にはホタルが飛び交う光景も。
中江さんにとって、民宿はオーナーが自分のペースでお客さんをもてなすことを楽しみ、山里の暮らしの魅力を伝える場だという。その人柄にひかれ再々訪れるリピーターも多い。

● アクセス 大宮大台ICから約20分

〒519-2507 多気郡大台町栗谷 1026-1
☎0598-76-1337
1 日 1 グループ（8 名まで）
平日素泊まり 1 人 4000 円
金・土曜。祝前日 3 割 UP
調理体験夕食 1500 円　朝食 500 円
ランチ（5 名以上・要予約）1000 円～ 1500 円
P　あり
http://web-odai.info/asobu/mikukawa.html

熊野市｜農家民宿やまもと

退職後に大阪からUターンされた山本さんご夫婦が営む「農家民宿やまもと」は、海・山・川の大自然を満喫できる熊野市にある。
道路から 100m 程度離れているので、夜になると通り過ぎる車の音も届かず、人工的な明かりも見えない。ときおり聞こえるのは鹿や雉の鳴き声、見上げれば夜空のきらめき、都会から訪れた人は、普段の暮らしと全く別の空間に身を置いていることを実感する。夜が明けたら山歩き、川遊び、魚釣りに山菜とり、野菜づくりが体験できる。
オーナーの山本さんは、野菜作りをしながら農家民宿やまもとを開業した。農家民宿を一つの場として都会の人に「もう一つの生活スタイル」としての田舎暮らしを体験してもらい、都市と地方の関係を変えていきたいと、山本さんは考えている。
地域の案内や移住の相談にも対応してもらえる。

〒519-4564 熊野市飛鳥町佐渡 450
☎090-6817-8041
　１日１組限定（定員６名）
　素泊まり 3500 円
　料理体験夕食 2000 円
　朝食 500 円
Ｐ　あり
http://www.seikou-udoku.com/
http://seikou-udoku.blog.jp/

● アクセス 熊野大泊ICから約15分

多気町｜つじ屋

神奈川より移住された高梨さんご夫婦は、多気町の集落の中にどっしりと身を構える、築約 180 年の歴史ある大きな古い町家を改修して 2015 年に体験民宿「つじ屋」を開業した。「つじ屋」は、食事の提供、時には町の人々の交流の場としても使われるあたたかな民宿へと変身をとげた。
高梨さんご夫婦は、自ら米や野菜を栽培し、鶏を育てながら、お金に頼りすぎない持続可能な暮らしを続けている。生活に使う火も自給自足というから驚きだ。二人のそういった考え方に触れられるだけでなく、2017 年に新しく改修した五右衛門式風呂でリフレッシュできるのも宿泊者にとっての魅力だ。
持続可能な暮らしに関心のある方の移住相談にも応じている。

〒519-2216 多気郡多気町古江 1282
☎0598-49-4667
　宿・食事ともに予約のみ
　不定休
Ｐ　４台
https://www.facebook.com/mietsujiya/

● アクセス 勢和多気ICから約10分

農林漁業体験民宿を開業しませんか？

農林漁業体験民宿開業に、ご関心のある方は、農山漁村づくり課までお気軽にご相談ください。
「農林漁業体験民宿開業の手引き」もご用意しています。

【相談窓口】**三重県 農林水産部 農山漁村づくり課　059-224-2518**

ええとこやんか三重

三重県移住・交流ポータルサイト「ええとこやんか三重」は、三重県内の移住に関する情報を集めたポータルサイトです。「暮らし・住まい・お仕事」をはじめ、セミナーの情報や体験ツアー・先輩移住者の紹介など様々な情報が収集できます。

あなたの「三重暮らし」実現のため、
お手伝いします！お気軽にご相談ください。

ええとこやんか三重　検索

東京｜ええとこやんか三重移住相談センター

東京では、常設の移住相談センターを設置しています。移住相談アドバイザーや就職相談アドバイザーがきめ細かな相談に対応します。

場所：東京交通会館８階　ふるさと回帰支援センター内
東京都千代田区有楽町 2-10-1
電話：080-9512-5093　E-mail：mie@furusatokaiki.net
開館時間：火～日 10:00 ～ 18:00
定休日：月・祝日・お盆・年末年始

大阪・名古屋｜移住相談デスク

大阪・名古屋では、月１回の移住相談デスクを開催しています。

大　阪

毎月第２土曜日に開催！
場所：シティプラザ大阪１階
大阪ふるさと暮らし情報センター内
（大阪市中央区本町橋 2-31）
開催時間　10:00 ～ 18:00

名古屋

毎月第３土曜日に開催！
会場や開催時間については、
地域連携部 地域支援課まで
（電話 059-224-2420）
お問い合わせください。

三重暮らしについてのお問い合わせ
三重県 地域連携部 地域支援課｜三重県津市広明町 13 番地　059-224-2420　chiiki@pref.mie.jp

県内各地で「地域おこし協力隊」が活躍しています！

「地域おこし協力隊」は、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることで、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした制度です。
具体的には、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移動した方を地方自治体が「地域おこし協力隊員」として委嘱し、地域おこしの支援や住民の生活支援などの各種地域協力活動に従事してもらいながら、その地域への定住・定着を図る取組です。
県内では、2018（平成30）年１月現在、60人を超える協力隊員が12市町で活躍し、地域資源を活用した地域おこしや移住相談など、多様な活動を展開しています。農業分野においても、「農作物の生産拡大」や「農と福祉の連携」「ブランド野菜の栽培」などで協力隊員が活躍しています。
現在、県内各地で隊員の募集がありますので、「地域おこし協力隊」にご興味のある方は、三重県移住・交流ポータルサイト「ええとこやんか三重」の「おしごと」のページでご確認ください！

【先輩の取組事例】
▶熊野市 村瀬さん：P25（地域おこし協力隊の活動地域に定住して有機農業）をご覧ください

【相談窓口】
三重県 地域連携部 南部地域活性化推進課 059-224-2195

三重県 新規就農相談窓口

■総合相談窓口（三重県下全域）

公益財団法人三重県農林水産支援センター 担い手育成支援課（就農相談関係） 中間管理課（農地に関する相談関係） ※市町単位の農地のご相談は、各市町農業委員会又は担当課へお問い合わせください。	〒515-2316　松阪市嬉野川北町 530 番地 TEL 0598-48-1226　FAX 0598-42-8221 TEL 0598-48-1228　FAX 0598-42-8221
三重県農林水産部担い手支援課	〒514-8570　津市広明町 13 番地 TEL 059-224-2354　FAX 059-223-1120

■各地域の相談窓口（三重県の機関）

桑名農政事務所 桑名地域農業改良普及センター	〒511-8567　桑名市中央町 5-71 TEL 0594-24-3641　FAX 0594-24-3695
四日市農林事務所 四日市鈴鹿地域農業改良普及センター	〒510-8511　四日市市新正 4-21-5 TEL 059-352-0636　FAX 059-352-0628
四日市農林事務所 四日市鈴鹿地域農業改良普及センター 鈴鹿普及課	〒513-0809　鈴鹿市西条 5-117 TEL 059-382-8665　FAX 059-382-4933
津農林水産事務所 津地域農業改良普及センター	〒514-8567 津市桜橋 3 丁目 446-34 TEL 059-223-5104　FAX 059-223-5151
松阪農林事務所 松阪地域農業改良普及センター	〒515-0011　松阪市高町 138 TEL 0598-50-0556　FAX 0598-50-0623
伊勢農林水産事務所 伊勢志摩地域農業改良普及センター	〒516-8566　伊勢市勢田町 628-2 TEL 0596-27-5170　FAX 0596-27-5254
伊賀農林事務所 伊賀地域農業改良普及センター	〒518-8533　伊賀市四十九町 2802 TEL 0595-24-8115　FAX 0595-24-8146
熊野農林事務所 紀州地域農業改良普及センター	〒519-4393　熊野市井戸町 371 TEL 0597-89-6125　FAX 0597-89-6138
中央農業改良普及センター （茶・果樹・花き・畜産関係の相談）	〒515-2316　松阪市嬉野川北町 530 番地 TEL 0598-42-6716　FAX 0598-42-7762

■教育研修機関

三重県農業大学校	〒515-2316　松阪市嬉野川北町 530 番地 TEL 0598-42-1260　FAX 0598-42-5835

みえいろ2018

三重県の農村暮らし応援ガイドブック｜みえいろ

2018（平成30）年3月発行

MIE pref.
三重県

三重県農林水産部担い手支援課

〒514-8570 津市広明町13番地
059-224-2016 ／ ninaite@pref.mie.jp